

# 平安宮内裏跡・聚楽第跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 平安宮内裏跡・聚楽第跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所





調査区北半部 第2～4面（北から）



調査区南半部 第2・3面（北東から）



Y=-23,355

Y=-23,350



X=-108,540

X=-108,545

X=-108,550

X=-108,555



第2～4面の遺構オルソ画像（1：100）

# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、グループホーム建設に伴う平安宮跡・聚楽第跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

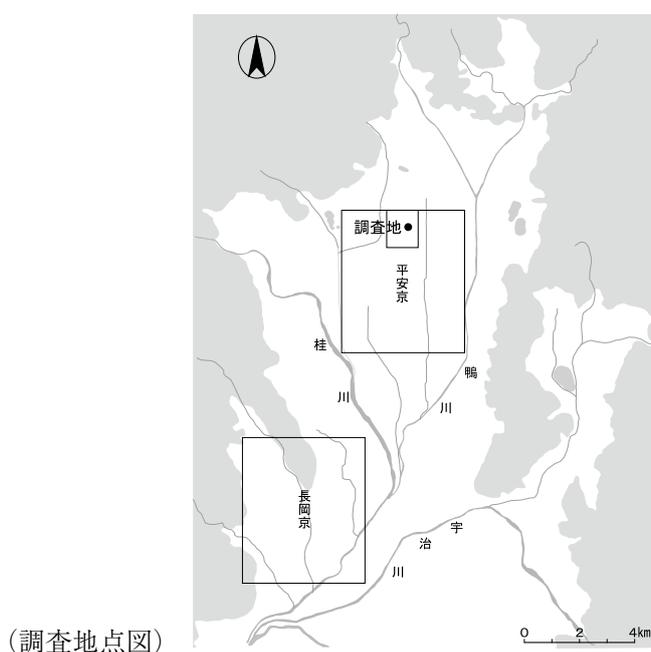
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成27年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |          |   |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名  | 平安宮跡・聚楽第跡（文化財保護課番号 15 K 114）              |
| 2 調査所在地  | 京都市京都市上京区出水通土屋町東入東神明町290番地の1・2            |
| 3 委 託 者  | 株式会社エクセレントケアシステム 代表取締役 大川一則               |
| 4 調査期間   | 2015年6月29日～2015年8月17日                     |
| 5 調査面積   | 145㎡                                      |
| 6 調査担当者  | 近藤奈央                                      |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」を参考にし、作成した。  |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）            |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                            |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。         |
| 11 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                      |
| 12 遺物番号  | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。                       |
| 13 本書作成  | 近藤奈央                                      |
| 14 備 考   | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	3
(3) 周辺の調査	5
3. 遺 構	11
(1) 基本層序	11
(2) 遺構の概要	11
(3) 第1面の遺構	17
(4) 第2面の遺構	17
(5) 第3-1面の遺構	20
(6) 第3-2面の遺構	20
(7) 第4面の遺構	24
4. 遺 物	26
(1) 遺物の概要	26
(2) 土器類	26
(3) 瓦類	28
(4) 石製品	33
(5) 金属製品	33
5. ま と め	34
(1) 検出遺構の変遷	34
(2) 検出した建物の特定	36
(3) 登華殿の検討	36
(4) 弘徽殿の検討	38
(5) 基壇状盛土20の検討	38

# 図 版 目 次

- 巻頭図版1 遺構 調査区北半部 第2～4面（北から）  
巻頭図版2 遺構 調査区南半部 第2・3面（北東から）  
巻頭図版3 遺構 第2～4面の遺構オルソ画像（1：100）

- 図版1 遺構 1 調査区南半部 第1面全景（北から）  
2 調査区北半部 第1面全景（北から）  
図版2 遺構 1 調査区南半部 第2・3面全景（北から）  
2 調査区北半部 第2面全景（北から）  
図版3 遺構 1 調査区北半部 第2～4面全景（北から）  
2 調査区南半部 平安時代整地層断面（南東から）  
図版4 遺構 1 溝12・溝17（北から）  
2 基壇状盛土20（南東から）  
3 溝38（南から）  
図版5 遺構 1 溝45南半（北西から）  
2 溝45の底石（北から）  
3 溝45の縁石・底石（東から）  
4 土坑30遺物出土状況（北東から）  
図版6 遺構 1 建物1（北西から）  
2 建物1 柱穴33検出状況（南東から）  
3 建物1 柱穴34断面（南西から）  
4 建物1 柱穴34根固め石検出状況（西から）  
図版7 遺物 土器類・埴・石製品・金属製品  
図版8 遺物 軒丸瓦・軒平瓦

# 挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：300）	2
図3	調査前全景（北西から）	2
図4	作業状況（南西から）	2
図5	周辺の調査位置図（1：1,500）	5
図6	調査区西壁・北壁断面図（1：50）	12
図7	第1面平面図（1：100）	14
図8	第2～4面平面図（1：100）	15
図9	調査区南半部A-A'ライン土層断面図（1：50）	16
図10	溝12の被熱痕がある側石（南から）	17
図11	基壇状盛土20実測図（1：40）	18
図12	溝12・溝17実測図（1：40）	19
図13	溝38・溝45北半実測図（1：40）	21
図14	溝45南半実測図（1：40）	22
図15	土坑18断面図（1：30）	23
図16	土坑30・柱穴44実測図（1：20）	23
図17	建物1実測図（1：50）	25
図18	土器類実測図（1：4）	27
図19	半円形文様のある土器	27
図20	軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	29
図21	丸瓦・塼拓影及び実測図（1：4）	31
図22	石製品実測図（1：4）	32
図23	銭貨拓影（1：2）	33
図24	平安時代前期から後期の遺構変遷図（1：200）	35
図25	弘徽殿・登華殿建物配置図	36
図26	弘徽殿・登華殿想定図（1：200）	37

## 表 目 次

表 1	平安宮内裏略年表	4
表 2	周辺の調査一覧表	6
表 3	遺構概要表	11
表 4	遺物概要表	26

## 付 表 目 次

付表 1	土器類観察表	39
付表 2	瓦類観察表	40
付表 3	石製品・金属製品観察表	40

# 平安宮内裏跡・聚楽第跡

## 1. 調査経過

本調査は、グループホーム建設事業計画に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

調査地は、京都市上京区出水通土屋町東入東神明町290番地の1・2に所在する(図1)。平安京における天皇の住まいであった平安宮内裏跡及び豊臣秀吉が造営した聚楽第跡にあたる。

今回の調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、「文化財保護課」という)による試掘調査が行われ、内裏殿舎に関係するとみられる石列や整地層、聚楽第の堀跡とみられる落込みなどが確認された。この試掘結果を基に文化財保護課より発掘調査が必要として指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施するはこびとなった。

調査区は南北23m、東西8.6mのL字形に設定した(図2)。敷地内での掘削土置場確保のため、調査区は南北に2分割して、南半部、次いで北半部の反転調査を行った。また、調査区中央西端で検出した遺構の広がりを確認する目的で、西側を南北4.5m、東西1m拡張した。調査面積の総計は145㎡である。



図1 調査地位置図(1:2,500)

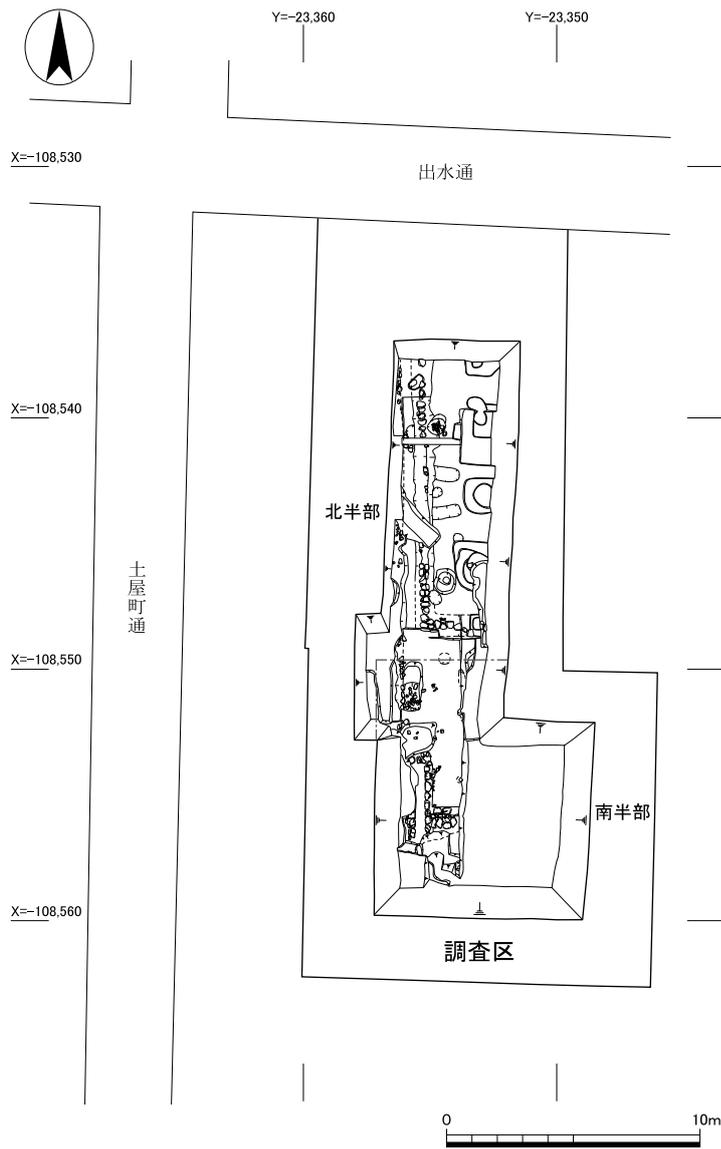


図2 調査区配置図 (1 : 300)

調査は、2015年6月29日から付帯工事及び南半部の重機掘削を開始した。各遺構面の調査毎に文化財保護課の視察を受け、遺構掘り下げなどの確認を行った。調査の進展により、内裏殿舎に関する石列検出面を保存し、下層遺構の調査は行わないことになったが、攪乱坑壁面などで平安時代前期とみられる遺構が認められたことから、文化財保護課の指導により、この部分を掘り下げて下層遺構の調査を行った。記録などの作業終了後、重機による埋め戻しを行い、8月17日にすべての作業を終了した。

なお、平安宮内裏の建物に関する重要な遺構であることから、地権者と文化財保護課の間で保存協議が行われた。その結果、建物の設計変更が行われ、検出遺構は現地の地中で保存されることとなったため、埋め戻しに際しては、検出遺構を保護砂と土囊で養生した。



図3 調査前全景 (北西から)



図4 作業状況 (南西から)

## 2. 位置と環境

### (1) 地理的環境

調査地は、京都盆地北部に位置し、船岡山から南へ張り出す丘陵先端部に立地する。周辺は粘土やシルト、砂礫層が基盤となり、特に聚楽土と呼ばれる黄色から黄褐色を呈する精良なシルト混りの細砂層が分厚く堆積している。このように安定した地盤に位置していることから、洪水の被害を受けにくい高燥な土地であり、平安宮を造営するのに適した場所であったといえる。

調査地周辺の現状をみると、敷地北側の出水通の標高が48.8m、調査地南側の新出水通の標高が47.3mで、約1.5mの高低差を生じている。南側隣地との間には1m程度の段差があるが、調査地内は現代の造成盛土によって平坦に均されていた。

### (2) 歴史的環境

調査地は平安宮内裏の弘徽殿と登華殿の推定地に位置する。内裏は、天皇の住まいとして、平安宮内でも最も早くに造られた施設で、桓武天皇が遷御した延暦十三年（794）十月二十二日には完成していたと考えられている。

平安宮内裏は、東西57丈（約171m）、南北72丈（約216m）を複廊で囲った内郭と、その外側をさらに築地塀で囲った東西73丈（約219m）、南北100丈（約300m）の外郭により二重に囲郭される構造である。内郭南部に紫宸殿を中心とする儀礼の場、中央部に仁寿殿を中心とする天皇の日常の居所、北部に后妃の居住域である後宮が広がっていた<sup>2)</sup>。当初、造営された建物は主要殿舎のみであったが、必要に応じて増築・改造が行われ、最終的には『延喜式』所載の「内裏図」に見られるような建物配置へと整備されたと考えられている。

内裏は、天徳四年（960）九月二十三日に左衛門陣からの出火により、遷都以降、初めて内郭内郭がほぼ全焼する。その後も内裏は度々火災に見舞われ、安貞元年（1227）の火災までに十数回の罹災と再建を繰り返した（表1）。11世紀中頃以降は、平安京内の邸宅などを「里内裏」として利用する頻度が高くなるとともに再建は滞りがちとなり、新造されてもすぐに里内裏から遷御しない場合が増えたことから、内裏は次第に荒廃したとされる。そのような状況の中、保元二年（1157）に信西（藤原通憲）による平安宮の復興が企図され、大規模な修復が行われた。しかし、承久元年（1219）の焼亡後、安貞元年（1227）から始められた内裏新造の途中にまたもや焼失し、その後再建されることなく廃絶した。

鎌倉時代以降、平安宮の跡地は、安土桃山時代に豊臣秀吉により聚楽第が造営されるまで「内野」と呼ばれる空閑地が広がることとなった。市街地化が進むのは聚楽第が破却された江戸時代以降のこととなる<sup>3)</sup>。

次に調査地に推定される弘徽殿と登華殿の概略を述べる。弘徽殿は天皇の日常の居所であった清涼殿の北側に位置する七間四面の南北棟で、後宮の中でも格式の高い殿舎である。貞観十七年

表1 平安宮内裏略年表

天皇	和歴	西歴	日付	出来事	文 献
桓武	延暦十三年	794	10.22	平安京遷都	『日本紀略』『類聚国史』
村上	天徳四年	960	9.23	内裏焼亡、職曹司に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』
	應和元年	961	11.2	新造内裏(清涼殿)に遷御	『日本紀略』『西宮記』
円融	貞元元年	976	5.11	内裏焼亡、職曹司に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『百鍊抄』
	貞元二年	977	7.29	新造内裏に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『百鍊抄』
	天元三年	980	11.22	内裏焼亡、職曹司に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『百鍊抄』
	天元四年	981	10.27	新造内裏に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『百鍊抄』
花山	永観二年	984	8.27	新造内裏に遷御	『日本紀略』『百鍊抄』
	長保元年	999	6.14	内裏焼亡、太政官に渡御	『日本紀略』『百鍊抄』
一条	長保二年	1000	10.11	新造内裏に遷御	『日本紀略』『権記』『百鍊抄』
	長保三年	1001	11.18	内裏焼亡、職曹司に遷御	『日本紀略』『百鍊抄』
	長保五年	1003	10.8	新造内裏に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『百鍊抄』
	寛弘二年	1005	11.15	内裏焼亡、太政官朝所に遷御	『日本紀略』『小右記』『百鍊抄』
	寛弘三年	1006	6月以前	新造内裏に遷御か？	『御堂閔白記』
	寛弘七年	1010	11.28	新造一条院に遷御	『日本紀略』『御堂閔白記』『権記』『百鍊抄』
三条	寛弘八年	1011	8.11	新造内裏に遷御	『日本紀略』『小右記』『権記』
	長和三年	1014	2.9	内裏焼亡、太政官朝所に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『小右記』『百鍊抄』
	長和四年	1015	9.2	新造内裏に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『御堂閔白記』『小右記』『百鍊抄』
11.19			内裏焼亡、枇杷殿に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『小右記』『百鍊抄』	
後一条	寛仁二年	1018	4.28	新造内裏に遷御	『日本紀略』『扶桑略記』『御堂閔白記』『左経記』『百鍊抄』
後朱雀	長暦三年	1039	6.27	内裏焼亡、太政官朝所に遷御	『扶桑略記』
	長久二年	1041	12.19	新造内裏に遷御	『扶桑略記』『百鍊抄』
	長久三年	1042	12.8	内裏焼亡、太政官朝所に遷御	『扶桑略記』『百鍊抄』
後冷泉	永承元年	1046	10.8	新造内裏に遷御	『扶桑略記』『百鍊抄』
	永承三年	1048	11.2	内裏焼亡、太政官朝所に遷御	『扶桑略記』『百鍊抄』
	天喜六年	1058	2.26	内裏未使用のまま焼亡	『百鍊抄』『康平記』
後三条	延久三年	1071	8.28	新造内裏に遷御	『百鍊抄』『十三代要略』『栄華物語』
白河	永保二年	1082	7.29	内裏焼亡、六条院に遷御	『扶桑略記』『百鍊抄』
堀河	康和二年	1100	6.19	新造内裏に遷御	『殿暦』『中右記目録』
後白河	保元二年	1157	3.23	信西(藤原通憲)による大内裏の復興	『兵範記』
			10.8	新造内裏に遷御	『兵範記』『愚管抄』『百鍊抄』
	文治五年	1189	12.3	内裏の修造	『吾妻鏡』
順徳	承久元年	1219	7.13	内裏焼亡	『百鍊抄』
後堀河	安貞元年	1227	4.22	新造途中で内裏焼亡、内裏の廃絶	『百鍊抄』

(875)に清和天皇の遷御が確認できる。天徳四年(960)の火災により焼失し、河内国司に再建が割り当てられた。正暦五年(994)には弘徽殿と飛香舎の渡殿が放火されたが、すぐに鎮火している。しかし、長保元年(999)、各殿舎の造営の記録から弘徽殿も再度焼けたとみられる。弘徽殿の名称は13世紀前半まで記録に残ることから内裏廃絶まで存続していたと考えられる。宇多天皇の中宮藤原温子、醍醐天皇の皇后藤原穩子、村上天皇の女御藤原述子、花山天皇の女御藤原低子、一条天皇の女御藤原義子、後朱雀天皇の皇后禎子内親王らが居住した。

登華殿は弘徽殿の北側に位置する七間四面の南北棟である。延喜九年(909)に醍醐天皇の中宮が遷御したと記述があり、平安時代中期初頭にはすでに造られていたとみられる。天徳四年の火災により焼失し、備前国司に再建が割り当てられた。長和三年(1014)の内裏火災では登華殿が出火元となり多くの殿舎が灰燼に帰したという。弘徽殿と同様に13世紀前半まで記録に残ることから内裏廃絶まで存続していたとみられる。一条天皇の中宮藤原定子、後朱雀天皇の尚侍藤原嬉子、後三条天皇の中宮馨子内親王らが居住した。<sup>4)</sup>

### (3) 周辺の調査

平安宮内裏は住宅密集地に位置するため、調査の大部分は立会調査や小規模な発掘調査である。ここでは平安宮内裏内郭及び内郭回廊の主な調査について概要をまとめる(図5・表2、以下地点番号のみ記載する)。

**内裏内郭** 6地点は、襲芳舎推定地東端にあたる。平安時代の柱穴や土坑を検出し、攪乱から凝灰岩切石が出土した。襲芳舎に関わる遺構・遺物と考えられる。また、出土した土器類では白色土器の比率が高い。

7地点は、襲芳舎と登華殿推定地の間にあたる。平安時代前期の北西から南東方向の溝を検出し

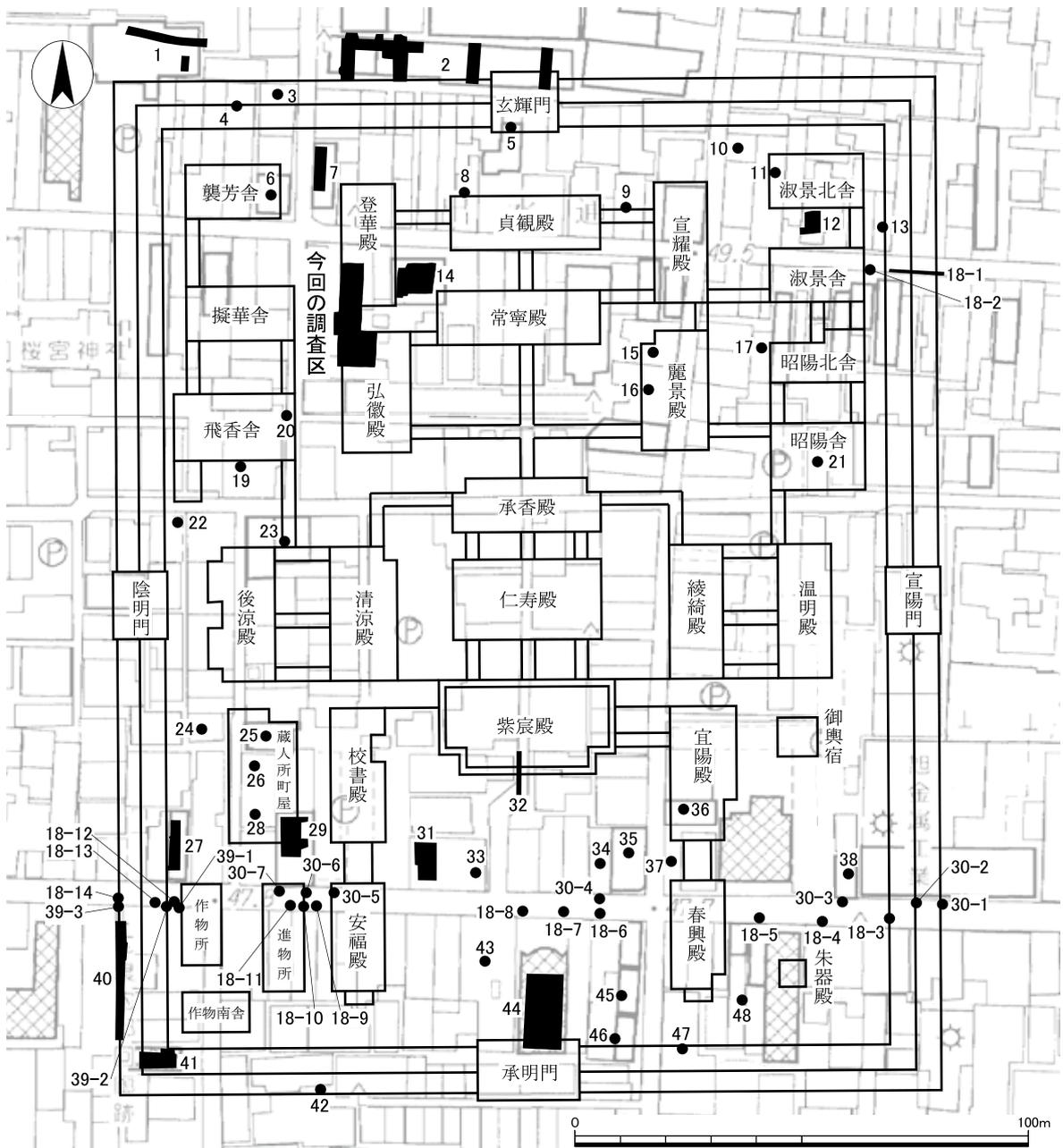


図5 周辺の調査位置図(1:1,500)

表2 周辺の調査一覧表

地点	推定施設	調査方法 調査記号	調査期間 調査機関	調査 面積	主な遺構	主な遺物	備考	文献
1	蘭林坊ー内郭北面回廊の間	試掘	1999.3.26 市保護課	28㎡	深さ1.5m以上、幅2.7m以上の南北方向の濠状遺構	中世の輸入磁器片	聚楽第外郭西濠の西肩口か？	1
2	蘭林坊ー玄輝門ー内郭北面回廊	発掘	1974.7.25 ～9.10 平安博物館	147㎡	平安前期の東西溝	平安前期～後期の土器類・瓦	蘭林坊南側溝	2
3	内郭北面回廊	立会 HQ179	1996.7.29～31 市埋文	—	GL-0.3mで遺物包含層	時期不明の土器	—	3
4	内郭北面回廊	立会 HQ295	2009.11.2 市埋文	—	巡回時、工事終了	—	—	4
5	玄輝門	立会 HQ433	1998.2.3 市埋文	—	GL-0.2mまで盛土	—	—	5
6	襲芳舎	立会 No.31	1979.4.17～18 市埋文	—	GL-1.2mで平安の柱穴・土坑・凝灰岩	平安前期～中期の土器類・瓦、江戸の土器・陶磁器	白色土器の割合が高い	6
7	襲芳舎ー登華殿の間	試掘	1983.3.7～18 市埋文	25㎡	平安前期の溝、平安中期～後期の土坑	平安前期～後期の土器類・瓦	—	7
8	貞観殿	立会 HQ417	2006.12.11 市埋文	—	GL-0.37mまで盛土	—	—	8
9	貞観殿ー宣耀殿の間	立会 HQ123	2014.7.4 市保護課	—	GL-0.2mまで盛土	—	—	9
10	内郭北面回廊	立会 HQ224	2012.9.19 市埋文	—	GL-0.4mまで盛土	—	—	10
11	淑景北舎	立会 HQ494	1995.3.8・24 市埋文	—	GL-1.28mで江戸遺物包含層	—	—	11
12	淑景舎ー淑景北舎の間	試掘・発掘 HQ73	1990.2.13～26 市埋文	18㎡	平安の土坑・集石遺構	平安中期の土器・墨書土器・瓦・金属製品	白色土器の割合が高い	12
13	内郭東面回廊	立会 HQ205	1997.8.11 市埋文	—	巡回時、工事終了	—	—	13
14	登華殿	発掘	1987.8.12 ～9.12 市埋文	45㎡	平安中期の溝・土坑、江戸の井戸・柱穴・土坑	平安中期の土器類・瓦、江戸の土器・陶磁器・金属製品	登華殿東雨落溝、天徳4年の火災遺物	14
15	麗景殿	立会 HQ288	1996.10.9 市埋文	—	GL-0.2mまで盛土	—	—	3
16	麗景殿	立会 HQ245	2006.9.1 市埋文	—	GL-0.3mまで盛土	—	—	8
17	昭陽北舎	立会 HQ040	2012.5.10 市埋文	—	GL-0.35mまで盛土	—	—	10
18	内郭北東部・南部	立会	1989.8.3 ～9.30 市埋文	—	基壇状遺構(18-3・12)、石敷遺構(18-2)、雨落溝状遺構(18-5)、火災処理土坑(18-4)、白砂の化粧土(18-6～8)、土器溜り(18-9・13)、暗渠(18-10)、石敷き雨落溝(18-11)、凝灰岩採取穴(18-12)、凝灰岩(18-14)、整地層(18-1)	平安中期～後期の土器類・瓦	内郭東面回廊基壇・雨落溝、内郭西面回廊基壇・凝灰岩採取穴、春興殿東雨落溝？、蔵人所町屋東雨落溝の南延長	15
19	飛香舎	立会 HQ387	2002.3.12 市埋文	—	GL-0.26mで遺物包含層	—	—	16
20	飛香舎	立会 HQ332	2014.12.3 ～2015.5・8 市保護課	—	GL-0.1mまで盛土	—	—	9
21	昭陽舎	立会 HQ185	1995.8.1～2 市埋文	—	盛土のみ	—	—	11
22	内郭西面回廊	試掘	1960.8.20 古代学協会	—	平安の整地層	—	—	17
23	飛香舎ー後涼殿の間	立会 HQ271	1995.10.6～9 市埋文	—	盛土のみ	—	—	11
24	後涼殿ー蔵人所町屋の間	立会 HQ028	2010.4.21 市埋文	—	GL-0.3mで近代以降の遺物包含層	—	—	18

地点	推定施設	調査方法 調査記号	調査期間 調査機関	調査 面積	主な遺構	主な遺物	備考	文献
25	後涼殿-蔵人所 町屋の間	立会 HQ251	1995.9.19~20 市埋文	—	盛土のみ	—	—	11
26	蔵人所町屋	立会 HQ260	2006.9.8~11 市埋文	—	GL-0.14mで江戸後期の遺 物包含層	江戸の土器・陶磁器	—	8
27	内郭西面回廊	発掘	1994.6.1~7.4 市埋文	22㎡	平安前期の基壇・雨落溝、 平安中期の基壇・石列・雨 落溝・焼土層	平安の土器類・瓦・凝灰 岩片・壁土・金属製品、 鎌倉~江戸初の土器類 ・瓦	回廊基壇と内側の 溝2時期の変遷と埋 没状況を確認	19
28	蔵人所町屋	立会 HQ263	2000.12.1 市埋文	—	GL-0.2mまで盛土	—	—	20
29	蔵人所町屋 校書殿	発掘	1987.8.24 ~9.30 市埋文	45㎡	平安初期・前期の溝、平安 中期の礎石据付穴、安土 桃山・江戸の土坑・柱穴	平安の土器類・瓦	校書殿付属施設？、 蔵人所町屋雨落溝・ 礎石据付穴	14
30	内郭南部	立会	1980.11.12 ~1981.2.6 市埋文	—	瓦敷き整地面(30-1)、凝灰 岩(30-2・3・4)、石組溝(30 -5・6)、土坑状遺構(30-7)	—	内郭東面回廊基壇・ 外側の整地、進物所 と安福殿の間の溝、 安福殿西溝	21
31	弓場殿	発掘	1978.1.17 ~2.15 市埋文	50㎡	平安後期の集石遺構、 江戸後期の井戸・土坑	奈良の土器、平安の土 器類・瓦、江戸の陶磁器 ・金属製品	奈良の遺物が出土	22
32	紫宸殿	試掘	2008.6.30 市保護課	10㎡	GL-2.3mまで盛土	平安の瓦、江戸の土器・ 陶磁器	聚楽第外郭南濠	23
33	紫宸殿南庭	立会 HQ068	2008.6.2~5 市埋文	—	GL-1.22mまで盛土	—	—	24
34	紫宸殿南庭	立会 HQ024	2014.4.17 市保護課	—	GL-0.2mまで盛土	—	—	9
35	紫宸殿南庭	立会 HQ030	1981.7.13 市埋文	—	盛土のみ	—	—	25
36	宜陽殿	立会 HQ072	1999.5.28 市埋文	—	GL-0.34mで江戸の遺物包 含層	—	—	26
37	宜陽殿・春興殿	立会 HQ084	1999.6.8~11 市埋文	—	GL-0.92mで江戸の遺物包 含層	江戸の土器	—	26
38	御輿宿一朱器殿 の間	立会 HQ116	2012.6.29 市埋文	—	巡回時、工事終了	—	—	10
39	内郭西面回廊	立会	1963.9 ~1964.3 古代学協会	—	平安前期の基壇・雨落溝、 集石遺構	平安の土器類・瓦	基壇西縁・東縁、作 物所西雨落溝？	17
40	内郭西面回廊	発掘	1969.2.10~20、 1973.8.4~9.2 古代学協会	11.8㎡ 99.5㎡	平安後期の基壇・雨落溝、 中世の敷石列	平安の土器類・瓦・青銅 片・るつぼなど、安土桃 山の土器・瓦	西面回廊基壇西縁 基壇幅が10.5mと推 定	27
41	内郭南面回廊	発掘	1980.1.5~14 市埋文	24㎡	平安後期の基壇・柱穴・石 組溝・整地層	平安後期の土器類・瓦	南面回廊暗渠	28
42	内郭南面回廊	立会 HQ087	1986.1.24~30 市埋文	—	GL-0.55mで凝灰岩4個	—	回廊基壇化粧石？	21・ 29
43	紫宸殿南庭	立会 HQ373	2005.3.4~9 市埋文	—	GL-0.55mまで盛土	—	—	30
44	承明門、 紫宸殿南庭	発掘	1984.12.14 ~1985.1.21 市埋文	140㎡	奈良の堅穴建物、平安の門 ・地鎮遺構・白化粧土、安土 桃山の門、江戸の井戸・土 坑	奈良の土器、平安の地 鎮具(輪宝・楸・金粉・銀 切板・琥珀・ガラス)・土 器類、安土桃山~江戸 の土器・陶磁器	奈良の遺構、承明門 雨落溝、地鎮遺構、 武家屋敷の門	31
45	紫宸殿南庭	立会 HQ002	1981.4.7 市埋文	—	盛土のみ	—	—	25
46	内郭南面回廊	立会 HQ451	1998.2.16 市埋文	—	GL-0.4mまで盛土	—	—	5
47	内郭南面回廊	立会 HQ409	2010.2.9 市埋文	—	GL-0.24mまで盛土	—	—	18
48	春興殿一朱器殿 の間	立会 HQ283	1994.10.5~14 市埋文	—	GL-1.13mで平安初頭~後 期の遺物包含層	—	—	32

※ 調査機関の「市保護課」は京都市文化財保護課、「市埋文」は財団法人京都市埋蔵文化財研究所を指す。

文献（表2 周辺の調査一覧表）

- 1 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年。
- 2 「平安宮推定内裏蘭林坊跡発掘調査の概要」『古代文化』第27巻第11号 財団法人古代学協会 1975年。
- 3 『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年。
- 4 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』京都市文化市民局 2010年。
- 5 『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年。
- 6 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告 昭和54年度』京都市文化観光局文化財保護課 1980年。
- 7 『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年。
- 8 『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年。
- 9 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年。
- 10 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年。
- 11 『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年。
- 12 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化市民局 1991年。
- 13 『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年。
- 14 『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年、『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年。
- 15 『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- 16 『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年。
- 17 「平安宮内裏址の調査」『平安博物館研究紀要』第3輯 財団法人古代学協会 1971年
- 18 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年。
- 19 『京都市内遺跡発掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年。
- 20 『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年。
- 21 『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- 22 『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-II 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年。
- 23 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年。
- 24 『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年。
- 25 『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年。
- 26 『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年。
- 27 「平安宮内裏内郭廻廊推定地の調査」『平安博物館研究紀要』第3輯 財団法人古代学協会 1971年、  
「平安宮内裏内郭廻廊跡第2次調査」『平安博物館研究紀要』第6輯 財団法人古代学協会 1976年。
- 28 『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』京都市文化観光局 1980年。
- 29 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年。
- 30 『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年。
- 31 『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年。
- 32 『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年。

た。溝は北に対して約30°西へ振る方位をとり、2つの殿舎を繋ぐ溝とみられる。また、土坑から平安時代中期から後期の遺物が多量に出土した。

12地点は、淑景舎と淑景北舎推定地の間にあたる。土坑からは、平安時代中期前半の遺物が多量に出土した。建物再建に伴う火災処理土坑とみられる。6地点と同様、白色土器の比率が高い。

今回の調査地東側の14地点は、登華殿推定地東端にあたる。平安時代前期から中期の溝と土坑を検出した。溝は南北方向の石組溝で、底石を数石残して大半が抜き取られていた。溝の東側には大型土坑があり、火災で被熱した土器・瓦・凝灰岩・壁土などが多量に出土した。埋土底部付近には整地土として使用されていたとみられる白砂が堆積する。出土した白色土器には、「應和年三月」、「夫」、「天」、「イ」、「年八月」、「朝」などの墨書があり、天徳四年の内裏の火災処理土坑と考えられる。南北溝が登華殿東雨落溝とすると、土坑は建物基壇外側に位置する。

立会調査の18-5地点では雨落溝状の石敷遺構を検出した。春興殿推定地東側の空閑地にあたっており、建物に関係するものかは不明である。18-10地点では石組暗渠を検出した。進物所東端推定地にあたっており、東雨落溝とみられる。18-4地点では空閑地と推定される場所で火災処理土坑を検出した。18-6～8地点では紫宸殿南庭に敷かれていたとみられる白砂による化粧土を検出した。

29地点は、蔵人所町屋推定地南東部にあたる。平安時代初頭のL字形の溝、平安時代前期の南北溝・東西溝、平安時代中期の礎石据付穴を検出した。平安時代初頭の溝は南西隅部で、東側の校書殿付属施設の基壇石材抜き取穴と考えられる。平安時代前期の溝はT字形に接続し、部分的に石列が残っていた。内側が基壇状に高くなっていることから建物の雨落溝と考えられる。東西溝は平安時代前期中頃に埋められ、南北溝は平安時代中期に大半の石を抜かれているが、溝上面に造成された整地土上面では柱穴を検出しており、建て替えに伴い建物の位置や構造などが変更されていたことがわかった。

30-5・6地点は、進物所と安福殿推定地の間にあたる。東西方向の石組溝を検出した。また、30-5地点では、石組溝の下層で南北方向の溝を検出しており、安福殿西側溝と考えられる。

**内裏内郭回廊** 2地点は、北面回廊・玄輝門及び回廊北側の蘭林坊推定地にあたる。平安時代の東西方向の素掘り溝を検出しており、蘭林坊南側溝と考えられる。内郭回廊に関連する遺構は確認できなかった。

北東部の立会調査18-1地点では東面回廊基壇の整地層、18-2地点では基壇内側の雨落溝底石を検出した。南東部の18-3地点では、東面回廊基壇と基壇西面の凝灰岩を検出した。南西部の18-12地点では西面回廊基壇東面の凝灰岩抜き取穴、18-14地点では抜き取られた凝灰岩が出土した。

27地点は、西面回廊推定地にあたる。西面回廊内側部分の遺構を良好な状態で検出し、新旧2時期の変遷を明らかにすることができた。築造時の回廊は基壇東面の地覆石列と基壇内側の雨落溝を検出した。修築後の回廊は、地覆石列・雨落溝を盛土で覆って裾部東面に新たに石を並べて内側に素掘りの溝を造っている。石材の中には被熱の痕跡があり、天徳四年の火災によるものと考えら

れる。回廊の築造は平安宮創建時、修築時期は平安時代前期中頃、平安時代中期には回廊基壇内部が埋め立てられた。

南東部の立会調査の30-1地点では瓦敷きの整地面を検出した。東面回廊外側の整地である。30-2地点では東面回廊に関わる凝灰岩を検出した。

南西部の立会調査の39-2・3地点では、凝灰岩切石や南北方向の石組溝を検出した。西面回廊基壇の西縁・東縁を考えられる。

40地点は、西面回廊推定地にあたる。平安時代後期の南北方向の凝灰岩石列・素掘り溝を検出した。回廊基壇西面部分と雨落溝と考えられる。39地点の成果とあわせると基壇幅は約10.5mと判明した。なお、凝灰岩石材は表面の風化が進み不揃いであることから転用材と考えられる。

41地点は、内郭回廊南西隅付近にあたる。平安時代後期の柱穴や南北方向の石組溝を検出した。石組溝は側石に加工痕のある凝灰岩を使用していることから、南面回廊をくぐる暗渠と考えられる。柱穴は石組溝芯から約5.5mの位置にあることから回廊築地の柱穴の可能性はある。

南部の立会調査の42地点では南面回廊基壇外側の凝灰岩列を検出した。

44地点は、南面内郭中央付近にあたる。平安時代の承明門跡及び地鎮遺構を検出した。承明門基壇北縁の雨落溝は新旧2時期の変遷がある。旧期の溝は凝灰岩切石を並べた痕跡を確認した。新期の溝は中心が北へ0.6m移動しており、大部分は抜き取られているが、側石と底石が残る。旧期の溝は平安宮創建期と考えられ、平安時代中期後半に修造された。また、石材の抜取穴からは13世紀・17世紀の遺物が出土した。雨落溝の北側には、整地土や化粧土が広がる。文献に記録が残る承和九年(842)・延久三年(1071)のものを含む4基の地鎮遺構が南北一直線上に並ぶ。土器類のほか密教法具の輪宝・楯や金粉・銀切板・琥珀・ガラスなどが埋納されていた。

**平安宮以外の調査成果** 44地点では、奈良時代の竪穴建物を4基検出した。その内の1基については煙道痕跡が認められた。31地点では、奈良時代の遺物が出土している。この一帯に集落が広がっていると想定される。

聚楽第に関係するとみられる遺構としては44地点で、安土桃山時代の東西に開く四脚門跡を検出した。武家屋敷の門とみられる。1地点では、聚楽第外郭西濠の西肩口とみられる東へ落ち込む遺構を確認した。32地点でも、外郭南濠南肩口とみられる落ち込みを検出した。

#### 註

- 1) 横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店 1994年。
- 2) 橋本義則『平安宮成立史の研究』塙書房 1995年。
- 3) 『京都の歴史 3 近世の胎動』学藝書林 1968年、『京都の歴史 4 桃山の開花』学藝書林 1969年。
- 4) 財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』角川書店 1994年。

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図6・9)

基本層序は、調査区北壁を基準として述べる。現地表より-0.6mまで近現代盛土層、-0.7mまでが近世整地土(図6-4)、-0.85mまでが近世初頭整地層(図6-36・37)、-0.95mまでが鎌倉時代整地層(図6-42・43)、-1.05mまでが平安時代後期整地層(図6-55・56)、以下は基盤層となる。基盤層は北から南に向かって緩やかに傾斜する。

また、一部では、平安時代後期の整地層直下で平安時代中期の整地層を確認した。平安時代中期整地層は、調査区北東部ではほとんど遺存しておらず、調査区南半部で上下2層に分かれて確認できた部分があった(図9、図版3)ので、上層を中期整地層1(図9-9~15)、下層を中期整地層2(図9-39~44)とした。これらは炭や焼土粒を含んでいることが特徴として指摘できる。

#### (2) 遺構の概要 (表3)

調査は、鎌倉時代整地層上面を第1面(図7)、鎌倉時代整地層下面及び平安時代後期整地層上面を第2面、平安時代中期整地層上面を第3面、基盤層上面を第4面として実施した。なお、平安時代中期整地層は2層に分けて、中期整地層1上面を第3-1面、中期整地層2上面を第3-2面とした。

なお、調査途中で遺構が保存されることが決定したので、平安時代中期整地層の掘り下げは全面的には行っていない。検出した遺構も規模などを確認するための最小限度の掘削に留めた。このため、第2面から第4面の平面図は一つの図として掲載する(図8)。また、調査は南半部、北半部に分けて反転して実施したが、遺構の記述はまとめて述べる。

調査で検出した遺構総数は45基である。ここでは遺構面順に各時期の主要な遺構について記述し、調査地の歴史の変遷については、まとめて総括する。

表3 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期	建物1、土坑25・26、柱穴44	第4面：1期
平安時代中期	整地層2、溝45、石21・22、土坑18・24・30・39・40・43、柱穴42、瓦溜27	第3-2面：2-a期
	整地層1、溝17・38、土坑41	第3-1面：2-b期
平安時代後期	整地層、溝12、基壇状盛土20	第2面：3期
鎌倉時代	整地層	第1面：4期

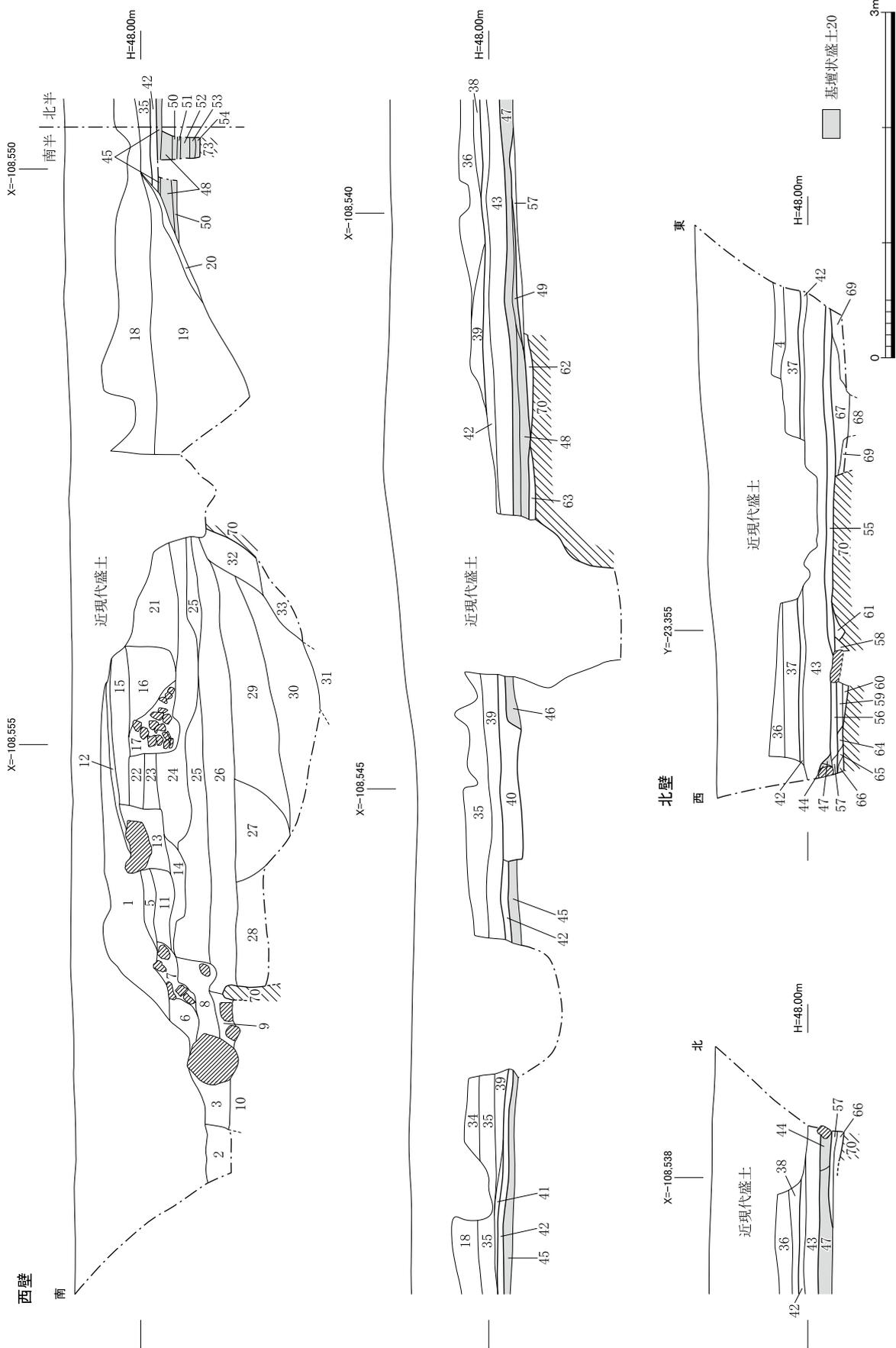


図6 調査区西壁・北壁断面図 (1:50)

西壁・北壁断面図層名

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 径3～5cmの10YR4/4褐色粘土ブロック少量含
- 2 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 棧瓦多量含
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 径2cmの2.5Y7/8黄色粘土ブロック少量含
- 4 10YR3/4暗褐色粘質土 径1～10cmの5YR5/6明赤褐色砂質土ブロック状の焼土・壁土含、炭多量含〔近世整地土〕
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 径0.5～1cmの礫含、焼土粒・炭多量含
- 6 10YR4/1褐灰色粘質土
- 7 10YR3/2黒褐色粘質土
- 8 2.5Y4/1黄灰色粘質土 焼土粒・炭・瓦少量含
- 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 微砂少量含、径3～10cmの礫含
- 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 棧瓦少量含
- 11 10YR5/6黄褐色粘質土 径2～10cmの礫多量含
- 12 2.5Y6/4にぶい黄褐色粘土
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 径2～10cmの礫含
- 14 10YR3/3暗褐色粘質土 焼土粒・炭少量含
- 15 10YR3/1黒褐色粘質土 径1～2cmの10YR7/6明黄褐色粘土ブロック少量含
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 径1～2cmの礫少量含
- 17 10YR3/3暗褐色粘質土混細砂 径10～15cmの礫多量含
- 18 10YR3/3暗褐色粘質土 径10～20cmの10YR7/6明黄褐色粘土ブロック多量含
- 19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 土師少量含〔近世土坑〕
- 20 7.5YR4/4褐色砂質土 非常に固く締まる〔近世土坑〕
- 21 10YR3/2黒褐色粘質土 径1～2cmの10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック少量含
- 22 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土 径1～2cmの10YR5/6黄褐色粘土ブロック少量含
- 23 10YR2/1黒色砂質土 土師・径1～3cmの礫少量含
- 24 10YR4/2暗黄褐色粘質土 径1～2cmの10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック少量含
- 25 10YR3/3暗褐色粘質土 炭・径1～2cmの10YR7/6明黄褐色粘土ブロック少量含
- 26 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 27 2.5Y3/3暗褐色粘質土 径1～2cmの礫少量含
- 28 10YR3/3暗褐色粘質土
- 29 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 径2～6cmの黄褐色粘土ブロック多量含
- 30 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 31 10YR4/4褐色粘土
- 32 10YR4/4褐色粘質土 炭・土師含
- 33 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 瓦・径3～5cmの礫含
- 34 2.5Y5/2暗褐色砂質土 径2～3cmの礫含
- 35 7.5YR3/2黒褐色粘質土 径0.5～3cmの礫含
- 36 2.5Y5/4黄褐色粘質土 径1～2cmの礫微量含
- 37 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土 炭・土師少量含
- 38 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 細砂混じり、径0.5～1cmの礫含
- 39 2.5Y2/1黒褐色粘質土 径1～2cmの礫含
- 40 2.5Y4/1黄灰色砂質土 微砂質、土師含、炭少量含

〔近世土取穴〕

〔近世初頭整地層〕

- 41 10YR4/2灰黄褐色粘質土 径0.5～1cmの礫少量含
- 42 10YR4/1褐灰色砂質土 微砂混じり、焼土粒・炭少量含
- 43 10YR3/4暗褐色粘質土 炭・焼土粒・瓦・径0.5cmの礫少量含
- 44 10YR4/6褐色粘土混10YR4/4暗褐色粘質土 炭・焼土粒・径1cmの礫微量含
- 45 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土 粘性あり、炭・焼土微量含
- 46 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 焼土粒含
- 47 7.5YR3/4暗褐色粘質土 細砂混じり、炭・焼土粒少量含
- 48 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 粘性あり、焼土粒・炭微量含
- 49 10YR2/3黒褐色粘質土 粘性あり、径1～2cmの礫・炭・焼土粒少量含
- 50 10YR3/3暗褐色粘質土 焼土粒・炭微量含
- 51 10YR4/4褐色粘質土 瓦多量含、焼土粒・炭微量含
- 52 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 炭・焼土粒多量含
- 53 10YR3/2黒褐色粘質土 粘性あり、径1～2cmの礫含
- 54 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土 炭微量含
- 55 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 細砂混じり、焼土粒・炭・径0.5cmの礫少量含
- 56 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 粘性あり、焼土粒少量含
- 57 7.5Y4/3オリーブ褐色粘質土 瓦含
- 58 10YR4/4褐色粘質土 瓦・炭少量含
- 59 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 細砂混じり 径0.5～1cmの礫含
- 60 10YR4/2暗灰黄色粘質土 土師微量含
- 61 7.5YR3/4暗褐色粘質土 焼土粒・土師含、炭極少量含〔薄灰石放取〕
- 62 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土 土師・炭・焼土粒少量含
- 63 10YR3/3暗褐色粘質土 炭・土師少量含
- 64 10YR3/3暗褐色粘質土 炭・径1～2cmの凝灰岩少量含
- 65 10YR4/4褐色粘質土 土師・炭微量含
- 66 10YR4/2灰黄褐色粗砂 粘質土・土師・炭少量含、径1～2cmの礫含
- 67 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 焼土粒・径0.5～2cmの礫少量含
- 68 10YR3/2黒褐色粘質土 炭・径1～3cmの礫少量含
- 69 10YR6/6明黄褐色粘土混10YR4/4褐色粘土 土師・径0.5～1cmの礫極微量含〔柱穴32掘形〕
- 70 10YR6/6明黄褐色粘土〔基盤層〕

〔鎌倉整地層〕

〔基壇状盛土20〕

〔平安後期整地層〕

〔溝38掘形〕

〔柱穴32〕

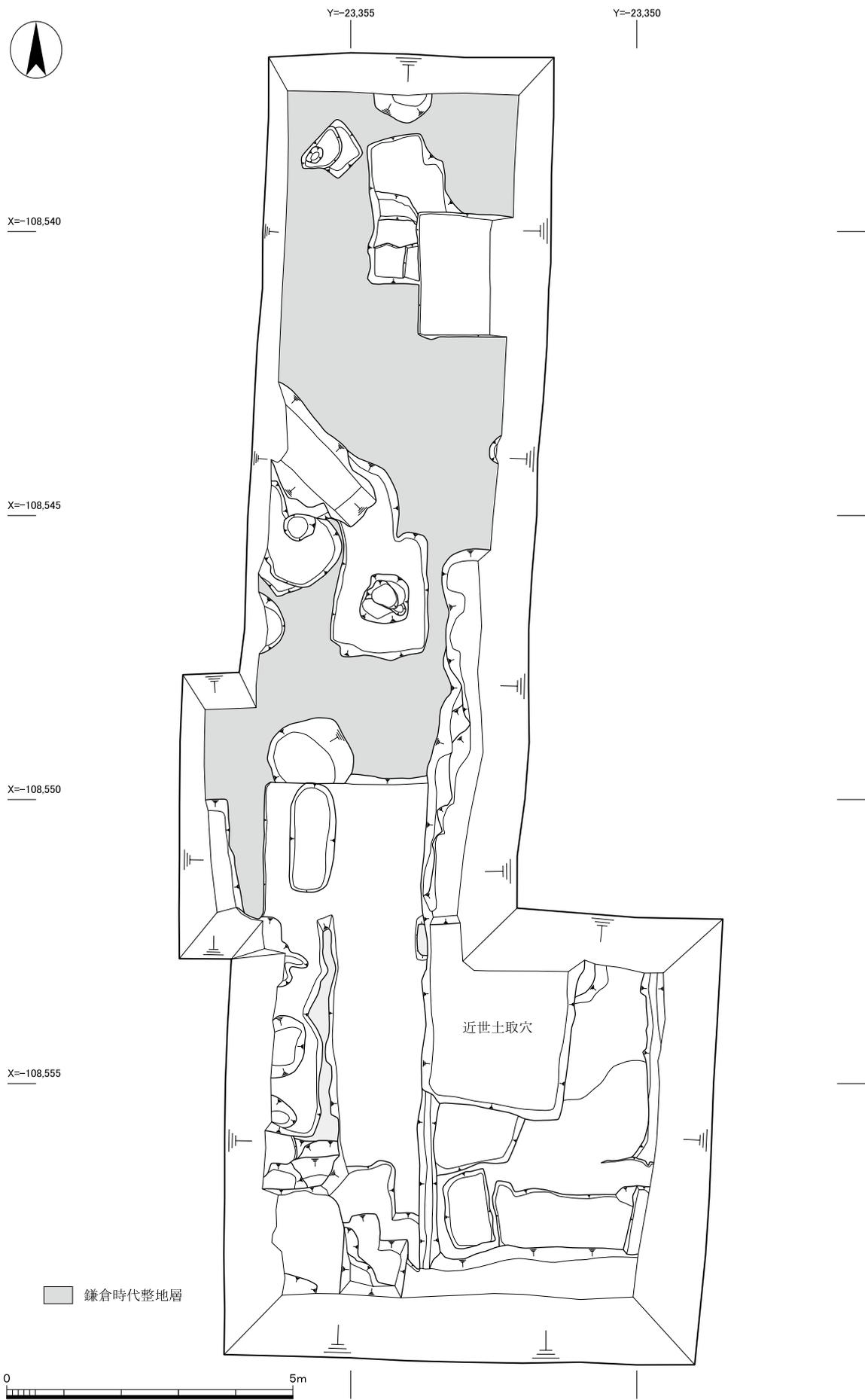
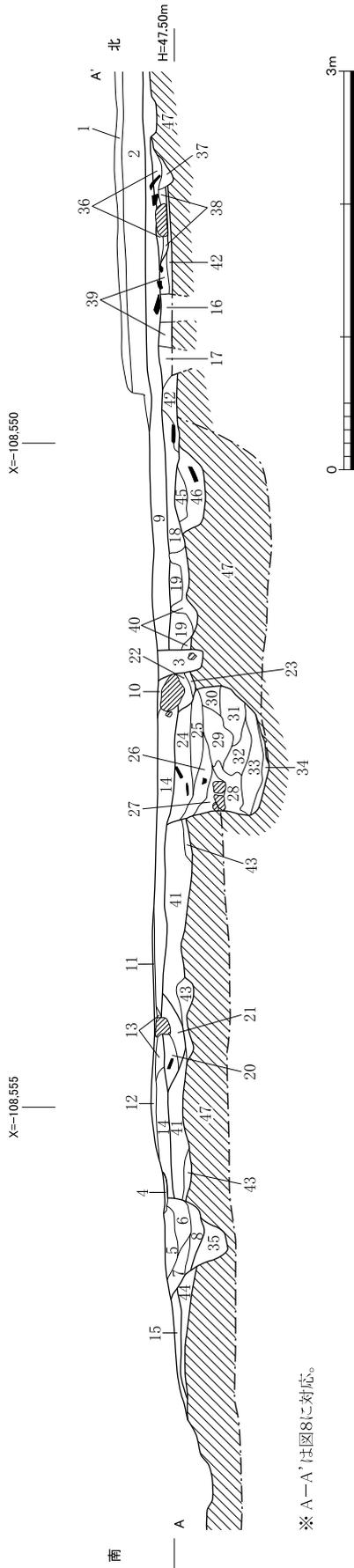


图7 第1面平面图 (1 : 100)





※ A-A' は図8に対応。

図9 調査区南半部A-A' ライン土層断面図 (1:50)

- |  |   |  |
|--|---|--|
| <p>1 10YR4/2灰黄褐色砂質土 土師・炭・径0.5cmの礫含、非常に固く締まる</p> <p>2 10YR3/4暗褐色粘質土 径0.5cmの礫・土師・焼土粒・炭・瓦少量含</p> <p>3 7.5YR3/2黒褐色粘質土 土師・径1~3cmの礫少量含(柱穴)</p> <p>4 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 土師少量含、焼土粒・炭少量含</p> <p>5 10YR4/4褐色粘質土 径1~2cmの2.5Y7/8黄色微砂ブロック、径0.5~2cmの礫・土師・炭・焼土粒含</p> <p>6 10YR3/2黒褐色粘質土 径0.5~1cmの礫含、径0.5cmの10YR6/6明黄褐色微砂ブロック少量含</p> <p>7 10YR3/3暗褐色粘質土 径0.5cmの炭・焼土粒少量含</p> <p>8 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 径0.5cm以下の焼土粒少量含</p> <p>9 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 粘性あり、炭・土師・焼土粒含、径0.5cmの礫多量、径0.5~1cmの凝灰岩少量含、非常に固く締まる</p> <p>10 2.5Y4/4褐色粘質土 焼土粒・径1~2cmの礫少量含</p> <p>11 10YR3/4暗褐色粘質土 土師・炭少量含</p> <p>12 10YR4/4褐色粘質土 焼土粒・土師少量含</p> <p>13 10YR4/2灰黄褐色粘質土 土師多量含</p> <p>14 10YR3/4暗褐色粘質土 土師・炭・焼土粒・瓦少量含</p> <p>15 10YR6/8明黄褐色粘土 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 径0.5~2cmの礫含、土師少量含</p> <p>16 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土 炭少量含</p> <p>17 10YR3/3暗褐色砂質土 炭・土師少量含</p> <p>18 10YR3/3暗褐色粘質土 炭・土師少量含</p> <p>19 2.5Y4/2オリーブ褐色粘質土 炭・土師少量含</p> <p>20 2.5Y5/3黄褐色粘質土 土師・炭・瓦少量含</p> <p>21 10YR3/4暗褐色砂質土 粘性あり、土師・径1~3cmの10YR6/6明黄褐色粘土ブロック含</p> <p>22 10YR4/4褐色粘質土 焼土粒・炭含</p> <p>23 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土 炭・焼土粒少量含</p> | <p>24 7.5YR3/3暗褐色粘質土 土師・炭少量含</p> <p>25 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 微砂混じり、焼土粒少量含</p> <p>26 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土 土師・焼土粒・炭少量含</p> <p>27 10YR5/3にぶい黄褐色微砂 粘性あり、焼土粒・炭少量含</p> <p>28 10YR4/4褐色粘土 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂 土師・炭少量含</p> <p>29 10YR4/2灰黄褐色粘質土 焼土粒・炭・土師少量含</p> <p>30 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 混粗砂 径1~2cmの2.5Y6/6明黄褐色微砂ブロック含、土師・炭少量含</p> <p>31 10YR3/3暗褐色粘質土 混粗砂 土師・炭・瓦少量含</p> <p>32 10YR3/2黒褐色粗砂 粘質土混じり、焼土粒・炭微量含</p> <p>33 10YR4/4褐色粘質土 炭・土師・瓦少量含</p> <p>34 2.5Y4/4暗灰黄褐色粘質土 焼土粒・炭少量含</p> <p>35 10YR3/2黒褐色粘質土 微砂混じり、径0.5cm以下の焼土粒・土師少量含〔土坑か〕</p> <p>36 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 瓦含</p> <p>37 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 土師・炭少量含</p> <p>38 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土 土師少量含〔溝45〕</p> <p>39 10YR4/4褐色粘質土 炭・土師少量含</p> <p>40 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土混10YR4/4褐色粘土 炭・径0.5cmの礫微量含</p> <p>41 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 粘性あり、径1~3cmの礫含、焼土粒・炭少量含</p> <p>42 10YR5/4にぶい黄褐色粘土 炭・土師微量含</p> <p>43 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 10YR4/4褐色粘土ブロック含 粘性あり、径1~3cmの礫含、焼土粒・炭少量含</p> <p>44 10YR6/8明黄褐色粘土 径5~10cmの10YR4/4褐色粘土ブロック多量含、径1cm以下の礫・土師微量含</p> <p>45 10YR4/4褐色粘質土 炭少量含、土師含</p> <p>46 10YR3/3暗褐色粘土 炭・焼土粒・瓦・径1cmの礫少量含</p> <p>47 10YR6/6明黄褐色粘土〔基盤層〕</p> | <p>〔鎌倉整地層〕</p> <p>〔溝17石採取〕</p> <p>〔溝17桶形〕</p> <p>〔平安中期整地層1〕</p> <p>〔石21桶形〕</p> <p>〔石22桶形〕</p> <p>〔溝45脚石採取〕</p> <p>〔平安中期整地層2〕</p> |
|--|---|--|

### (3) 第1面の遺構 (図7、図版1)

第1面の鎌倉時代整地層は、調査区北半部ではほぼ全面で検出したが、南半部では近世初頭の土取穴などの影響により、遺存状態は良くなかった。上面は固く締まっているが、鎌倉時代の遺構は検出していない。標高は調査区北端で約48.00m、調査区中央付近で約47.90mとほぼ平坦である。

近世初頭の土取穴は主に調査区南東部で検出した。規模は南北12.5m以上、東西4m以上、深さ0.75m以上ある。聚楽土の採取を目的とした土取穴である。

### (4) 第2面の遺構 (図8、巻頭図版1～3、図版2・3)

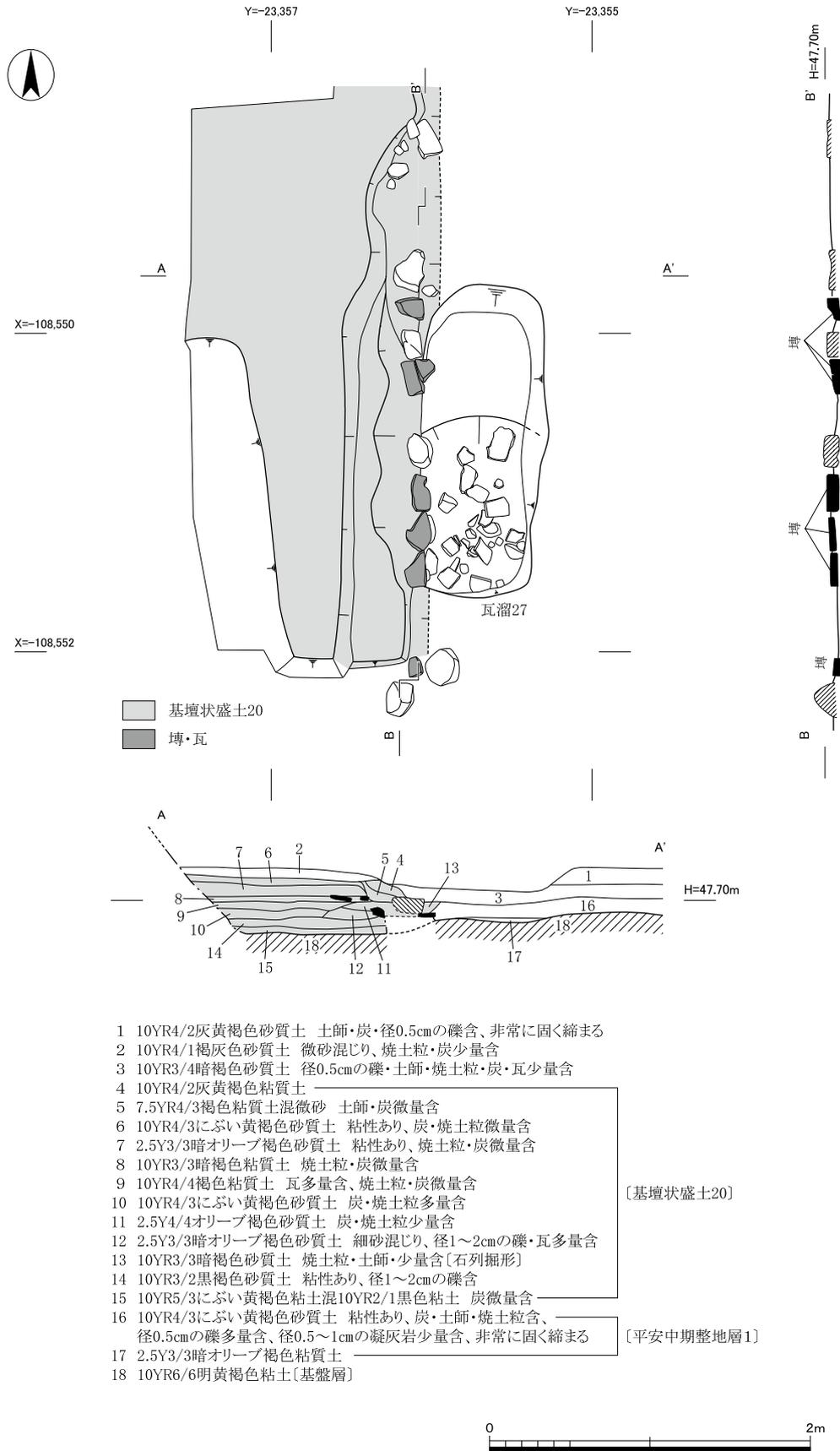
第2面の主要な遺構は、溝12、基壇状盛土20である。鎌倉時代整地層下面及び平安時代後期整地層上面で検出した。

**溝12** (図10・12、図版4) 調査区南西部で検出した南北方向の石組溝である。南側は攪乱により削平される。北側は北端部中央に塼が据えられており、ここが溝の北端になる可能性もあるが、近世の土坑により削平されており不明である。規模は長さ3.4m以上、内法約0.4m、外法約1.0m、深さ約0.1mである。東西の側面に側石を並べるが、底石は据えていない。溝底面は南へ緩やかに傾斜する。側石は、長軸20～40cm、短軸20～30cm、厚さ6～10cmの石材を、長軸を南北方向に揃えて並べている。石材の種類は東側石は砂岩やチャート、西側石は砂岩及び塼で、被熱痕がある石が数石ある (図10)。南西部の西側石の外側には、側石に平行して長さ15～20cm、幅約10cmの石材を縁石状に並べる。また、北端では側石の抜取穴を確認した。埋土は暗褐色砂質土で、平安時代後期の土師器が出土した。



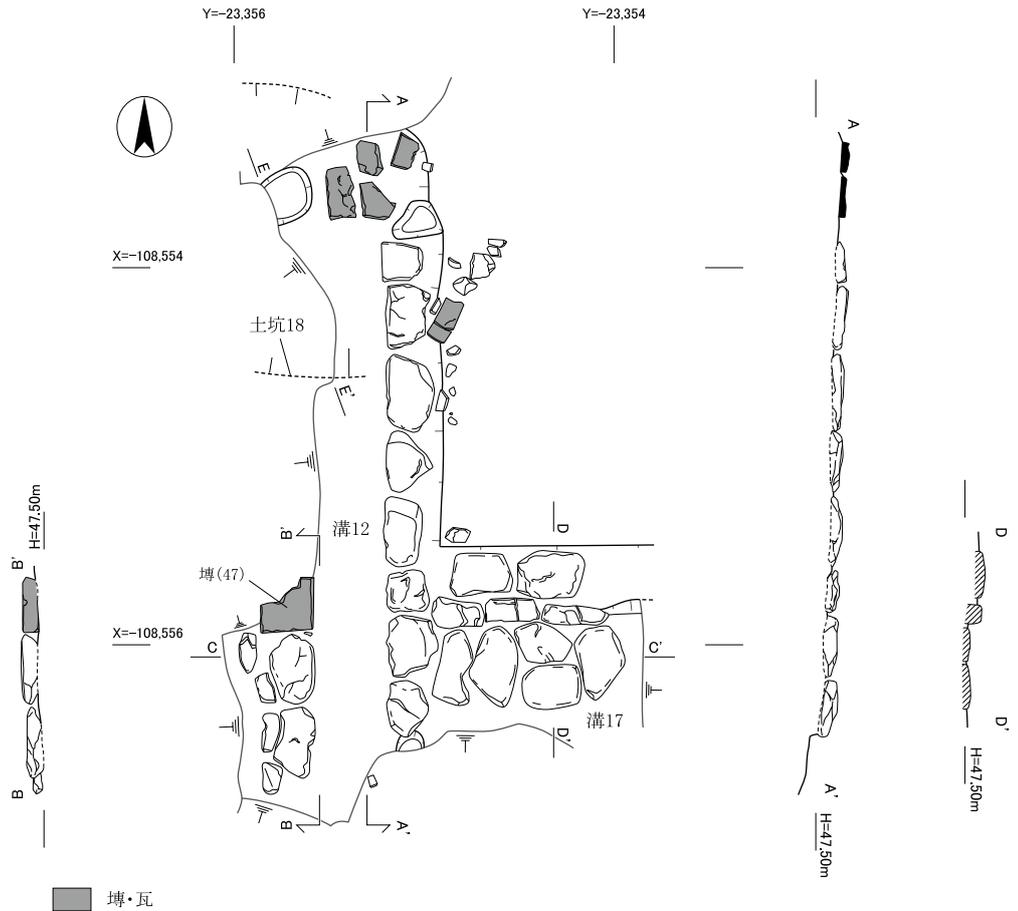
図10 溝12の被熱痕がある側石  
(南から)

**基壇状盛土20** (図11、図版4) 調査区西端で検出した南北方向の基壇状の高まりである。規模は、長さ14.5m以上、幅1.4m以上、高さ約0.15mである。西側・北側は調査区外へと延長しており、南側は攪乱により削平される。平安時代後期の整地層上に土を盛り上げて構築するが、いったん整地層を少し掘り窪めてから構築している部分がある。盛土は、瓦や礫を含む砂質土や粘質土で固く締まっている。上面は鎌倉時代の整地層に覆われる。北端部・中央部付近では、大きき10～25cmのチャートや砂岩、塼が南北に並んだ状態で検出しており、盛土東裾部の土留めと考えられる。平安時代前期から中期の土師器や瓦が出土した。

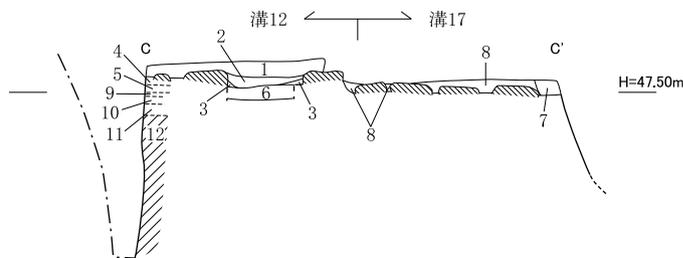


- 1 10YR4/2灰黄褐色砂質土 土師・炭・径0.5cmの礫含、非常に固く締まる
  - 2 10YR4/1褐灰色砂質土 微砂混じり、焼土粒・炭少量含
  - 3 10YR3/4暗褐色砂質土 径0.5cmの礫・土師・焼土粒・炭・瓦少量含
  - 4 10YR4/2灰黄褐色粘質土
  - 5 7.5YR4/3褐色粘質土混微砂 土師・炭微量含
  - 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 粘性あり、炭・焼土粒微量含
  - 7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土 粘性あり、焼土粒・炭微量含
  - 8 10YR3/3暗褐色粘質土 焼土粒・炭微量含
  - 9 10YR4/4褐色粘質土 瓦多量含、焼土粒・炭微量含
  - 10 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 炭・焼土粒多量含
  - 11 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土 炭・焼土粒少量含
  - 12 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土 細砂混じり、径1~2cmの礫・瓦多量含
  - 13 10YR3/3暗褐色砂質土 焼土粒・土師・少量含〔石列掘形〕
  - 14 10YR3/2黒褐色砂質土 粘性あり、径1~2cmの礫含
  - 15 10YR5/3にぶい黄褐色粘土混10YR2/1黒色粘土 炭微量含
  - 16 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 粘性あり、炭・土師・焼土粒含、径0.5cmの礫多量含、径0.5~1cmの凝灰岩少量含、非常に固く締まる
  - 17 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
  - 18 10YR6/6明黄褐色粘土〔基盤層〕
- [基壇状盛土20]
- [平安中期整地層1]

図11 基壇状盛土20実測図 (1 : 40)



※ E-E' は図15に対応。



- 1 7.5YR4/2灰褐色粘質土 粗砂・炭・焼土粒・土師少量含
- 2 10YR3/4暗褐色砂質土 [溝12埋土]
- 3 10YR3/2黒褐色粘質土
- 4 10YR4/4褐色粘質土 土師・炭少量含
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土
- 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土 焼土粒少量含、固く締まる
- 7 10YR4/4褐色粘質土
- 8 10YR4/4褐色粘質土 土師・炭・焼土粒含
- 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 土師・炭少量含、固く締まる
- 10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 [平安中期整地層2]
- 11 10YR5/6黄褐色粘土 径0.5~2cmの礫少量含
- 12 10YR6/6明黄褐色粘土 [基盤層]



図12 溝12・溝17実測図 (1:40)

### (5) 第3-1面の遺構(図8、巻頭図版1~3、図版2・3)

第3-1面の主要な遺構は、溝17・38、土坑41である。平安時代中期整地層1上面あるいは基盤層上面で検出した。ただし、土坑41は遺構保存のため完掘していない。

**溝17**(図9・12、図版4) 調査区南部で検出した東西方向の石組溝である。第2面の溝12東側側石に直交して接しているが、西側を溝12に壊されることから、溝12より先行する遺構である。東側・南側は攪乱により削平される。規模は長さ1.1m以上、内法約0.5m、北側縁石から底石南端間は約0.9m、深さ約0.05mである。底石の両側に側石・縁石を並べる構造と考えられるが、北側のみが遺存する。溝底面は東へわずかに傾斜する。底石は、長軸30~40cm、短軸20~25cm、厚さ6~10cmの平坦な石材を並べている。長軸を南北方向に揃える箇所と、東西に揃えて2石並べる箇所がある。側石は、長軸30~35cm、短軸10~15cm、高さ10cm程度の石材を、長軸を東西方向に据えて並べている。縁石は北縁に2石が遺存しており、長軸35cm、短軸25cm、厚さ6~10cm程度の石材を、長軸を東西方向に揃えて据えている。石材の種類はいずれも堆積岩である。土師器片が少量出土した。近世の土取穴西壁面で確認したところ、溝17の下層には土坑または溝状遺構があることが判明した(図9-35層)。埋土には炭や焼土粒が含まれていた。

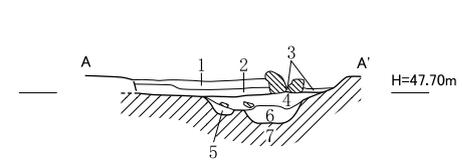
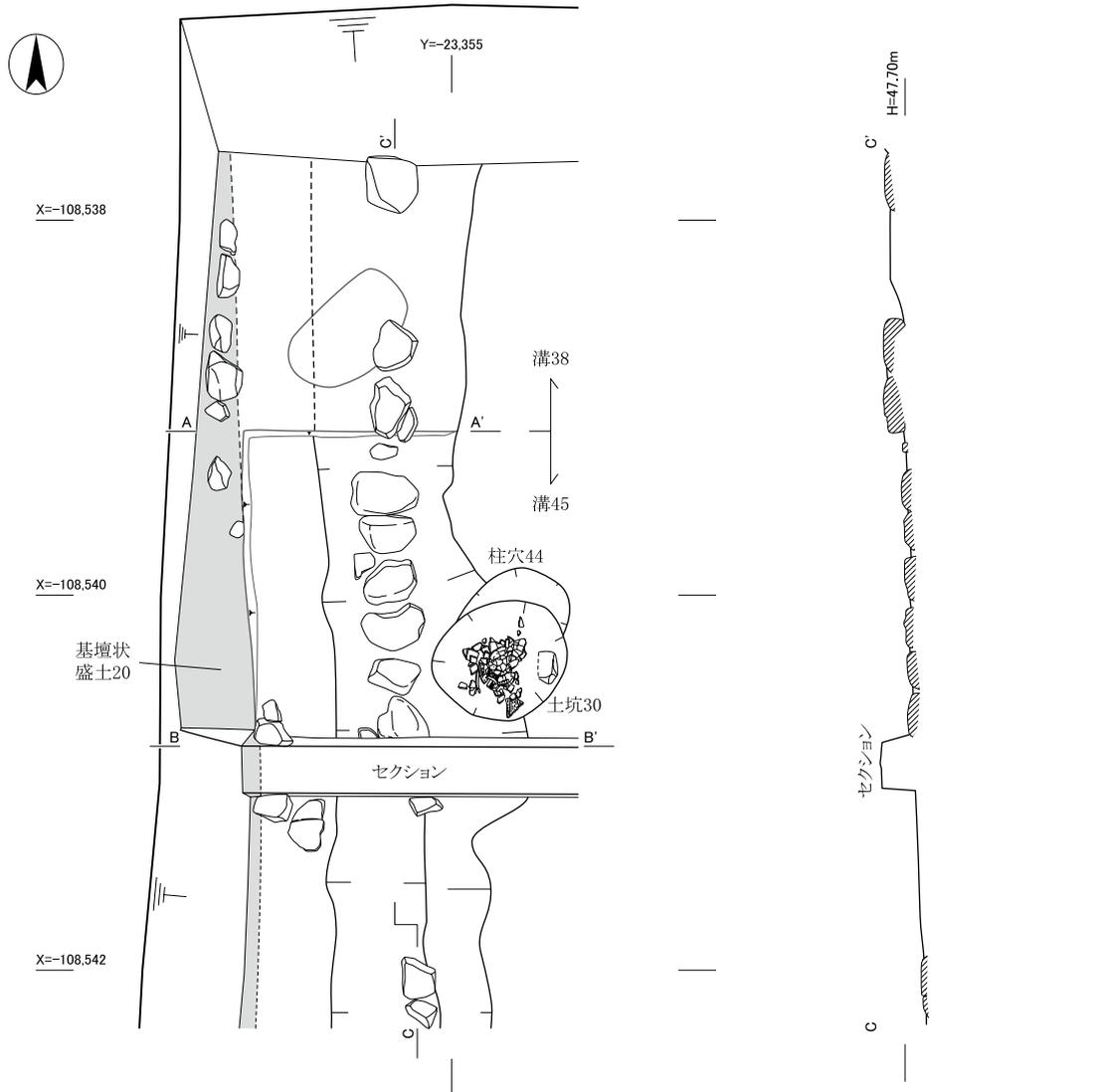
**溝38**(図13、図版4) 調査区北端部で検出した南北方向の石組溝である。北側は調査区外へ延長しており、南側は第3-2面の溝45北端部分で重複して不明瞭になる。規模は、長さ1.5m以上、内法約0.4mである。側石はなく、底石が3石遺存している。底石は、長軸30~35cm、短軸20~25cmの平坦な石材を並べている。南端の底石の下層で溝45の底石の抜き取り痕を確認した。

**土坑41** 調査区中央部で検出した。溝45の上面に位置しており、溝45東側石抜取後に掘削されたとみられる。平面形は楕円形で、長軸約0.55m、短軸約0.25m、深さは不明である。埋土は暗灰黄色砂質土で、土師器片が出土した。

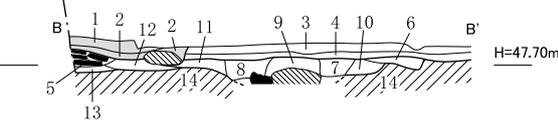
### (6) 第3-2面の遺構(図8、巻頭図版1~3、図版2・3)

第3-2面の主要な遺構は、溝45、石21・22、土坑18・24・30・39・40・43、柱穴42、瓦溜27がある。平安時代中期整地層2上面あるいは基盤層上面で検出した。ただし、土坑18・24・38及び瓦溜27は遺構保存のため完掘していない。

**溝45**(図9・13・14、図版5) 調査区北半部で検出したL字形の石組溝である。東側は調査区外へ延長しており、北側は第2面の溝38と重複するが、溝38の底石直下で溝45の石材の抜取穴を確認したことから、調査区外へ延長すると考えられる。規模は、南北部分が長さ11.0m以上、東西部分が長さ2.3m以上、内法約0.4m、掘形幅0.7~1.0m、深さ約0.1mである。主軸方位は北に対して西へ約1°振る。底石の両側に縁石を並べる構造であるが、縁石は南西隅に2石が遺存するのみで、大半は抜き取られていた。底石は、長軸20~40cm、短軸10~25cm、厚さ約10cmの平坦な石材を並べている。北半部は長軸を東西方向に揃えるが、南半部では長軸を南北方向に揃え、2石一对で据える箇所がある。縁石は、長軸30~40cm、短軸15~20cm、厚さ20cmの石材を、長軸を東



- A-A' 断面**
- 1 10YR4/4褐色砂質土混細砂～粗砂
  - 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土  
径0.5cmの焼土粒微量含〔整地層(平安時代中期1か)〕
  - 3 10YR4/2灰黄褐色砂質土
  - 4 10YR3/3暗褐色粘質土  
瓦多量・土師含
  - 5 10YR4/4褐色粘質土 土師微量含 [溝45石抜取穴]
  - 6 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土  
土師・炭微量含
  - 7 10YR6/6明黄褐色粘土〔基盤層〕



- B-B' 断面**
- 1 7.5YR3/4暗褐色粘質土 細砂混じり、炭・焼土粒少量含 [基壇状盛土20]
  - 2 10YR2/3黒褐色砂質土 粘性あり、径1~2cmの礫・炭・焼土粒少量含
  - 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 細砂混じり、焼土粒・炭少量含 [平安中期整地層]
  - 4 10YR3/4暗褐色砂質土 炭・土師少量含
  - 5 7.5Y4/3オリーブ褐色粘質土 瓦含
  - 6 10YR5/2灰黄褐色粘質土 土師少量含
  - 7 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 土師・炭少量含 [溝45石抜取穴]
  - 8 10YR4/2灰黄褐色粘質土 土師・径1~2cmの凝灰岩少量含 [溝45石抜取穴]
  - 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 土師微量含 [溝45埋土]
  - 10 10YR3/2黒褐色粘質土 土師微量含
  - 11 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土 土師微量含 [溝45掘形]
  - 12 10YR3/3暗褐色粘質土 炭・径1~2cmの凝灰岩少量含
  - 13 10YR4/4灰黄褐色粗砂 粘質土・土師・炭少量含、径1~2cmの礫含
  - 14 10YR6/6明黄褐色粘土〔基盤層〕



図13 溝38・溝45北半実測図 (1 : 40)

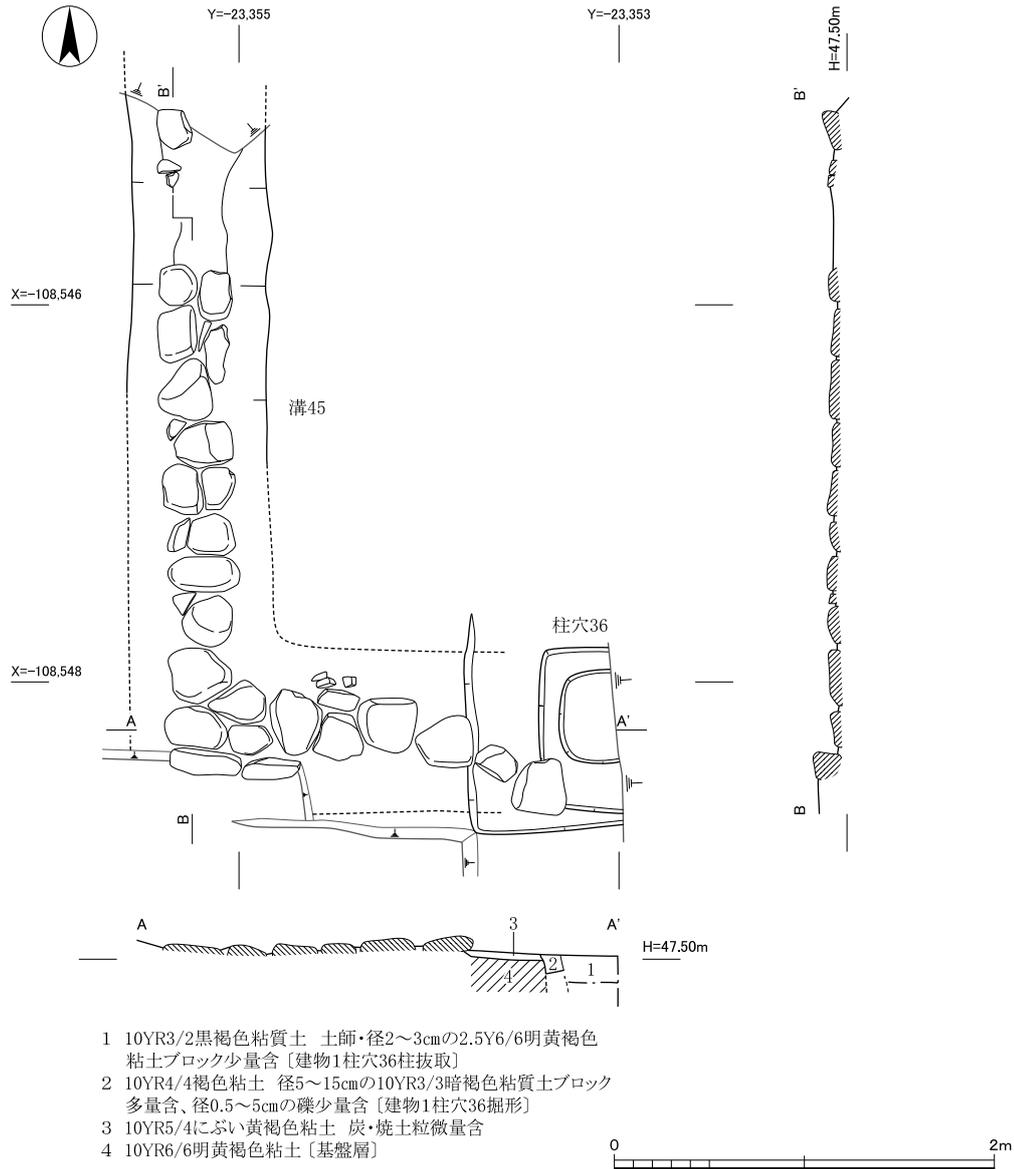


図14 溝45南半実測図（1：40）

西方向に据えて並べている。石材の種類はいずれも堆積岩である。石材の抜取穴から平安時代中期の軒平瓦が出土した。

石21（図9） 調査区南東部の近世の土取穴西壁で検出した。大きさは南北長15cm、厚さ12cmで、石材の種類は堆積岩である。掘形は南北0.7m、深さ0.15mである。

石22（図9） 調査区南東部の近世の土取穴西壁、石21の北側で検出した。大きさは南北長30cm、厚さ18cmで、石材の種類は堆積岩である。掘形は南北0.7m、深さ0.15mである。石21と石22はほぼ南北に並び、間隔は約2.5mである。

土坑18（図15） 調査区南西部、近世の土取穴東壁で検出した。南北1.5m以上、東西0.9m以上、深さ約0.9mで、底面や側面には凹凸がある。埋土には炭や焼土粒を含み、上層は精良な細砂や粗砂により整地される。

土坑24（図9） 調査区南東部の近世の土取穴の西壁で、石22の下面で検出した。南北約1.0m、

東西0.5m以上、深さ約0.7mである。埋土は炭や焼土粒を少量含む粘質土や細砂を主としており、砂や基盤層に近いブロック土を含む層もある。

**土坑30** (図16、図版5) 調査区北部で検出した。平面形は円形で、径約0.7m、深さ約0.2mである。埋土は上下2層に分かれる。中央に平安時代中期の土師器皿と多量の炭を含む。東側には大きき約20cmの石が斜めに落ち込む。土器を使用した祭祀土坑の可能性もある。また、埋土を洗浄したところ、少量の鍛造鉄片が含まれていた。

**土坑39** 調査区北半部で検出した。溝45に接する。平面形は円形で、径約0.4m、深さは不明である。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、平安時代中期の土師器片が多く出土した。

**土坑40** 調査区中央部北寄り検出した。西端は溝45により削平される。平面形は東西に長い楕円形で、長軸約1.1m、幅約0.6m、深さ0.05mである。埋土はにぶい黄橙色砂質土で、土師器が少量出土した。

**土坑43** 土坑39北側で検出した。西端は溝45により削平される。平面形は東西に長い楕円形で、長軸約1.0m以上、幅約0.5m、深さ0.05m以上である。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、遺物はほとんど出土していない。

**柱穴42** 調査区北部の土坑30南東肩口に接して検出した小型の柱穴である。平面形は円形を呈

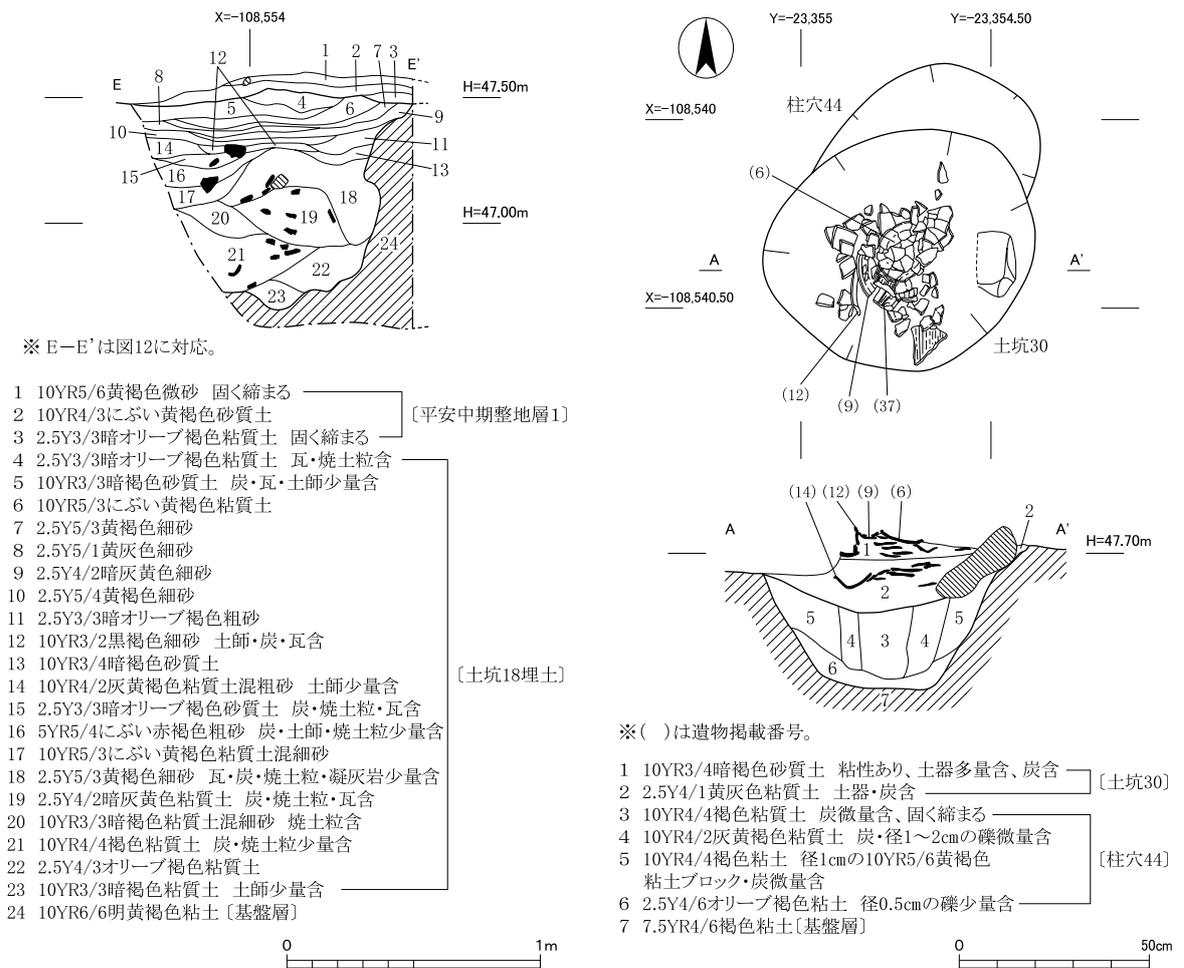


図15 土坑18断面図 (1:30)

図16 土坑30・柱穴44実測図 (1:20)

し、径0.15mある。周辺で同規模の遺構は未検出である。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、土師器片や丸瓦が出土した。

**瓦溜27** (図11) 調査区中央部西寄りの攪乱底面(基盤層上面)で検出した。西側は第2面の基壇状盛土20下面、東側・南側は中期整地層1下面へ広がる。規模は南北1.1m以上、東西0.7m以上である。埋土は炭や焼土粒を含む暗褐色砂質土である。土師器や瓦が出土した。火災処理に伴う廃棄土坑と考えられる。

#### (7) 第4面の遺構(図8、巻頭図版1・3、図版3)

第4面の主要な遺構は、建物1、土坑25・26、柱穴44がある。基盤層上面で検出した。ただし、建物1の柱穴及び土坑25は遺構保存のため完掘していない。

**建物1** (図17、図版6) 調査区北半の東端で検出した南北方向に並ぶ5基の柱穴(柱穴32～36)を建物1とした。東側・北側は調査区外へ広がる。また、南側・西側では柱穴を検出していないことから、南北3間以上、東西1間以上、南に庇または縁が取り付く建物の南西部と考えられる。建物の主軸方向は、ほぼ正方位である。柱間は、北側3間は約3.0m、南端の1間のみ約2.1mである。

柱穴32～36は、掘形の平面形は方形で、規模は一辺0.9～1.8mである。柱穴33～36は柱抜取痕が確認できた。柱穴34で半截作業を行い、柱掘形の深さを確認したところ、検出面から約1.4mであった。掘形底付近では根固め石と考えられる大きさ10cm程度の数個の石を検出した。掘形埋土は0.1～0.15mの厚さで版築状に積み固めている。

柱穴34掘形から平安時代前期の土師器や製塩土器が少量出土した。他の柱穴からは時期が判別できる遺物は出土していない。

**土坑25** 基壇状盛土20の構築状況を確認するため調査区中央部を基盤層まで掘り下げた際に検出した。平面形は円形で、径約0.4m、深さは不明である。埋土は炭や焼土粒を含む火災土とみられる土で充填されていた。

**土坑26** (図9) 調査区中央部の近世の土取穴西壁で検出した。南北約0.6m、東西0.3m以上、深さ約0.2mである。埋土は暗褐色粘土などで、平安時代前期の土師器・瓦が少量出土した。

**柱穴44** (図16) 調査区北部、第3-2面の土坑30下面で検出した。土坑30と一連の遺構の可能性ある。平面形は不整円形で、径0.5～0.6m、深さ約0.3mである。柱痕跡は径約0.3mある。平安時代前期の土師器及び炭が少量出土した。

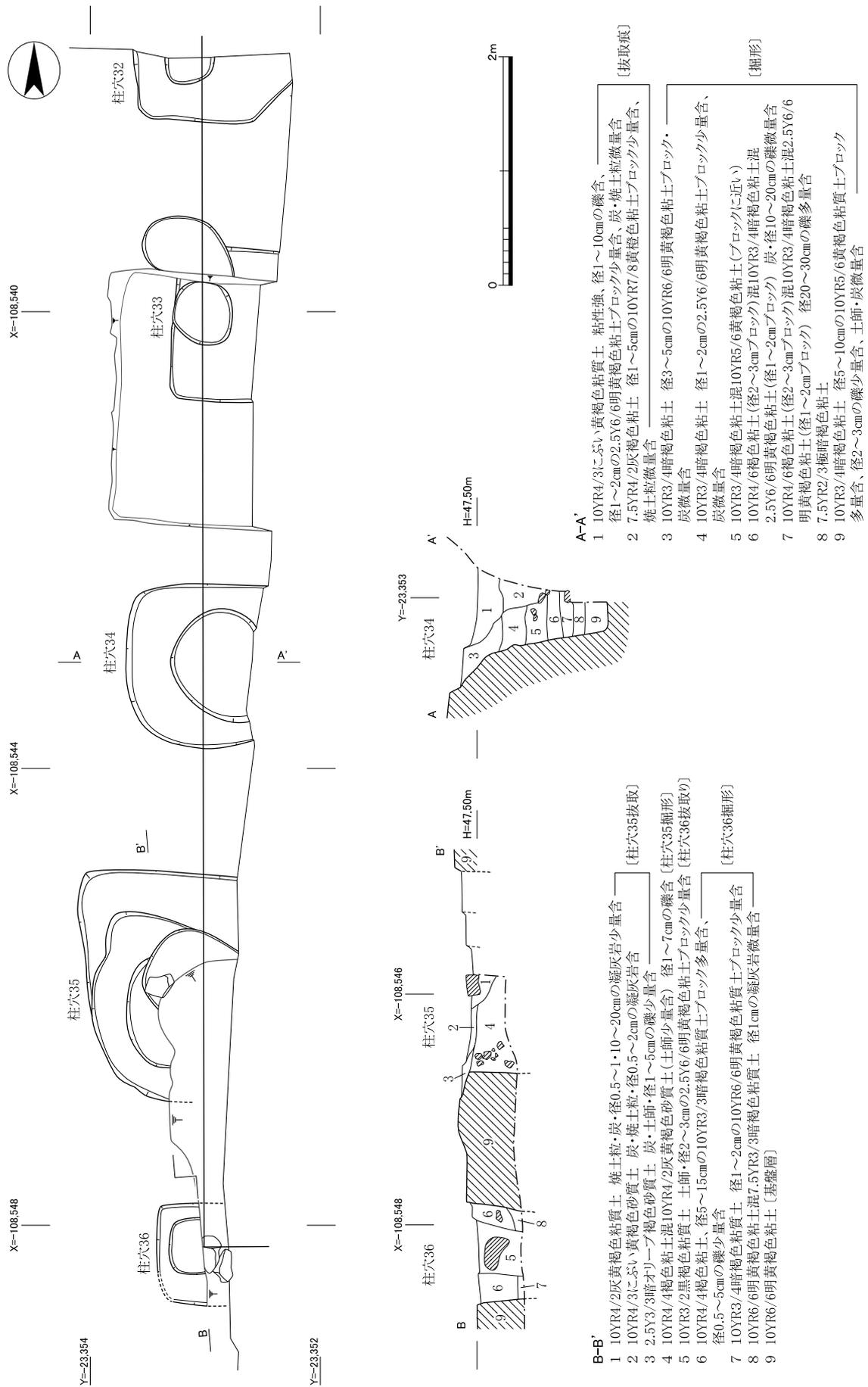


図17 建物1実測図(1:50)

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要 (表4)

遺物は整理箱に33箱出土した。土器類・瓦類が29箱、石製品が4箱である。平安時代中期及び江戸時代以降の遺物が多くを占め、平安時代前期・後期及び中世の遺物はほとんどない。

平安時代前期の遺物の大半は、後世の遺構や包含層に混入して出土しており、同時代の遺構に伴うものは小破片が多い。平安時代中期の遺物を種類別にみると、土器類では土師器が多く、黒色土器・須恵器・緑釉陶器・白色土器は少量で、灰釉陶器や輸入磁器は数点のみであった。また、瓦類も多い。平安時代中期から後期の整地層からは、被熱した壁土が出土しており、その中には白色土が塗られた壁土が数点含まれていた。近世初頭以降の遺物は主に土取穴から出土した。土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器、金属製品などである。その他、古墳時代の土師器高杯脚部や製塩土器が出土している。

なお、平安時代の土師器の年代観については、平安京・京都土器編年Ⅰ～ⅩⅣ期を使用する<sup>1)</sup>。

### (2) 土器類 (図18、図版7、付表1)

**古墳時代の土器 (1)** 1は土師器高杯の脚部である。調整は柱状部外面はタテ方向の丁寧なナデ、内面はシボリ、裾部外面は工具によるナデ、内面はヨコ方向のナデである。近世の土取穴から出土したが、古墳時代初頭に属する。

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器		土師器1点		
奈良時代末～平安時代初頭	土師器、瓦		土師器1点、瓦1点		
平安時代前期	土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、石製品		土師器4点、黒色土器2点、須恵器1点、緑釉陶器1点、瓦2点、埴1点、石製品3点		
平安時代中期	土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、瓦		土師器14点、軒瓦6点		
平安時代後期	土師器、瓦、金属製品		土師器1点、軒瓦12点、金属製品2点		
中世・近世以降	土師器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、染付磁器、金属製品、瓦				
合計		33箱	52点 (5箱)	0箱	30箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

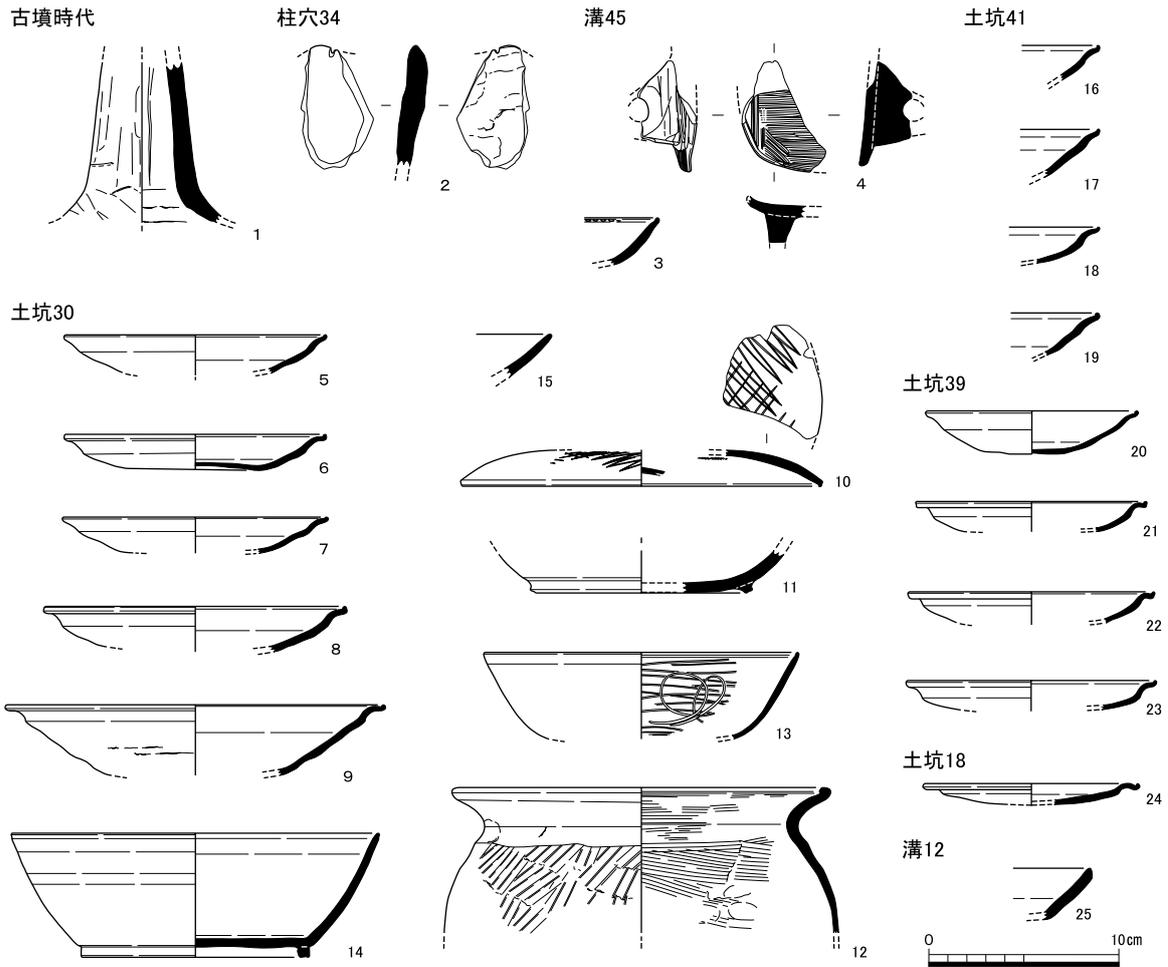


図18 土器類実測図（1：4）

建物1柱穴34出土土器（2） 2は製塩土器の口縁部片である。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに内弯する。内面は指頭圧痕、外面は未調整で粘土紐痕がのこる。胎土は径1mmの砂粒を多く含む。掘形から出土した。

溝45出土土器（3・4） 3は土師器杯である。口縁端部をわずかに摘み上げ、内面には直径2mm程度の半円形の文様が4箇所等間隔に並ぶ（図19）。線刻とみられるが、竹管状工具による圧痕の可能性もある。底石の間から出土した。

4は黒色土器風字硯陸部の破片である。脚部を貼り付け、径約1cmの円形透かしを施し、側面は丁寧に面取りする。陸部の立ち上がりは浅く、内外面を丁寧にミガキ調整する。残存部分では使用痕を確認できなかった。京都I期新段階からII期中段階とみられる。

土坑30出土土器（5～15） 5～9は土師器碗皿類である。口縁部をヨコナデによって外反させ、口縁端部を摘み上げる。口径は8・9が5～7に比べて大きい。5・9は口縁部外面から内面にかけて明赤褐色を呈しており、2次焼成を受けた可能性がある。5～9は京都III期古段階とみられる。



図19 半円形文様のある土器

10は土師器蓋である。口縁部は緩やかに湾曲し、端部は摘み出してわずかに垂下する。内面はハケ調整、外面はケズリのちナデで、格子状に暗文を施す。11は土師器杯の底部である。底面に高台を貼り付ける。内面はヨコナデ、底部外面はヘラ切りののちナデ、体部外面はケズりとナデである。10・11は全面に細かいひびが入っており、二次焼成を受けた可能性がある。12は土師器甕である。口縁部は球形の体部から屈曲して大きく外反し、口縁端部を内側へ摘み出す。体部内面はハケ調整、外面はタタキ調整、口縁部から頸部内面はハケ調整ののちヨコナデ、外面はヨコナデである。

13は黒色土器杯である。体部は平底の底部から屈曲して緩やかに外反する。口縁端部内面に浅い沈線がめぐる。外面はナデ、内面はミガキののち、螺旋状に暗文を施す。

14は須恵器杯である。底面に高台を貼り付ける。底部外面はヘラ切りののち回転ナデ、底部内面・体部内外面は回転ナデである。

15は緑釉陶器碗の口縁部片である。内外面に淡緑色の釉薬が掛かる。

10～15は平安時代前期の遺物が中期の遺構に混入したもので、10～12・14が京都Ⅰ期新段階、13・15が京都Ⅱ期新段階とみられる。

**土坑41出土土器** (16～19) 16～19は土師器碗皿類である。口縁部をヨコナデによって外反させ、口縁端部を摘み上げる。京都Ⅲ期古段階である。

**土坑39出土土器** (20～23) 20～23は土師器碗皿類である。口縁部は強く屈曲して、端部の立ち上がりが明瞭である。京都Ⅲ期中段階である。

**土坑18出土土器** (24) 24は土師器皿である。器高が低く、口縁部は強く屈曲して、端部の立ち上がりが明瞭である。京都Ⅲ期中段階である。

**溝12出土土器** (25) 25は土師器皿である。口縁部は直線的に開き、ナデは一段である。京都Ⅵ期古段階である。

### (3) 瓦類 (図20・21、図版7・8、付表2)

軒丸瓦・軒平瓦は、平安時代中期から後期のものが多い。近世土取穴から多くが出土している。第3-2面の瓦溜27は、炭や焼土粒とともに瓦がまとまって出土している。基壇状盛土20の土留めや溝12の側石として利用されていた塼は、現地保存したため詳細は不明であるが、厚さ3cm程度の方形である。

**軒丸瓦** (26～32) 26は複弁八弁蓮華文である。蓮弁及び子葉は盛り上がる。高さ1mm程度の界線の外側に珠文がめぐる。瓦当面に細かな傷や界線が途切れる箇所がある。瓦当裏面は布目圧痕が残り一本造り成形である。よく似た瓦としては、『木村捷三郎収集瓦図録<sup>2)</sup>』幡枝A窯跡出土の木村-2があり、中心に「栗」字のある幡枝B窯跡出土の木村-24も同文である。この他『平安京古瓦図録<sup>3)</sup>』大極殿跡出土の古-79などが同文である。内裏蘭林坊跡などでも出土している。

27は単弁蓮華文である。3弁と界線、2個の珠文を確認できるが、範の傷みが著しく、半分以上は不明瞭である。瓦当面に離れ砂が付着する。瓦当裏面のナデ痕跡が著しい。森ヶ東瓦窯跡出土の木村-221と同範とみられる。

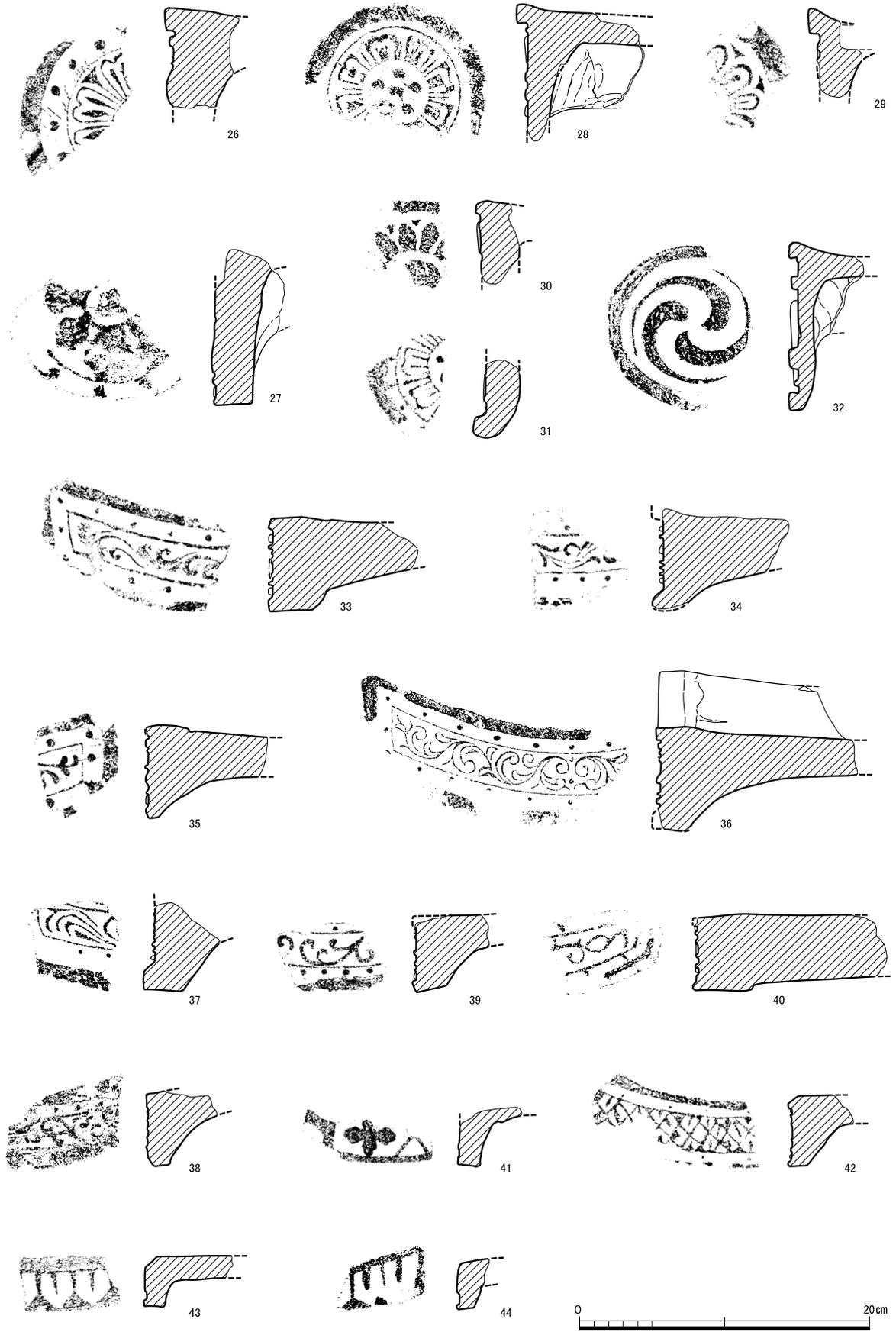


图20 軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）

28は単弁八弁蓮華文である。中房に1+5の蓮子を配置する。蓮子や単弁、間弁などに多くの範傷がみられる。瓦当上面は縦ナデ、瓦当裏面はナデ、凸面には布目圧痕が残る。仁和寺出土の木村-776と同文、内裏蘭林坊出土の古-201と同範とみられる。山城産である。

29は単弁蓮華文である。単弁及び子葉が配置され、間弁は撥形である。

30は単弁蓮華文である。間弁は撥形である。全体に磨滅している。

31は複弁八弁蓮華文である。花卉・間弁・界線は何れも線状である。珠文は周縁の立ち上がり部分と接する。内裏跡出土の古-216と同範とみられる。

32は右巻き三巴文である。頭部の先端は尖っている。頭部及び尾部は互いに接しない。周縁上に範型の痕が残る。瓦当上面は縦ケズリ、瓦当裏面はナデ、同下部は横ケズリである。山城産である。

26・27は平安時代中期、28～32は平安時代後期である。26～29・31は近世の土取穴、30・32は平安時代後期の整地層から出土した。

軒平瓦(33～44) 33は均整唐草文である。中心飾りは欠損しており不明である。界線及び珠文は明瞭に突出する。瓦当上面及び同下部は横ケズリ、凸部は縦ケズリ、凹部には布目圧痕が残る。凹面は赤褐色を呈する。内裏内郭回廊跡や豊楽院などから出土する古-296・297と同文で、長岡宮7757 A型式<sup>4)</sup>である。

34は唐草文である。中心飾りなどは欠損しており不明である。右へ2転以上するとみられ、主葉に枝葉が取り付く。界線は上部より下部が細く、珠文も下部に配置されているものの方が小さい。範の木目が認められる。古-376・377と同文。

35は唐草文である。細い界線に大振りの珠文を配置する。範傷が多く認められる。瓦当上面はケズリ、平瓦凹部は布目圧痕、顎部から凸部にかけて縦ケズリを施す。古-397や朝堂院跡出土資料<sup>5)</sup>と同範とみられる。河上瓦窯産に同文がある<sup>6)</sup>。

36は均整唐草文である。中心飾りは対向C字の中央に滴水形の珠文を2箇所配置する。瓦当上面や顎部下部は横ケズリ、平瓦凹部は布目圧痕、側面や平瓦凸部は縦ケズリで、丁寧な成形が行われている。小野瓦窯跡出土の小野-38～40と同文である。平安宮御井跡からも出土している<sup>8)</sup>。

37は唐草文である。中心飾りは欠損しており不明である。界線は細く、左下の珠文は痕跡のみを残す。平瓦凸部に曲線顎を貼り付けた痕跡が認められる。小野-31と同範と考えられ、同文は仁和寺子院跡などから出土している。

38は唐草文である。外側と内側から交互に反転する文様とみられる。全体的に文様が浅く、調整も粗い。

39は外側から内側に反転する唐草文である。大きく巻き込む主葉に、同様の枝葉が取り付く。下部の界線は主葉と接する。胎土は粗く、径1～3mm程度の礫が多く含まれる。山城産である。

40は唐草文である。珠文は界線と周縁に接する。段顎である。瓦当上面と顎部下部は横ケズリ、平瓦凸部は縦ケズリ、平瓦凹部は布目圧痕を縦ケズリで消している。瓦当面上半から平瓦部は黄橙色で、二次焼成を受けたとみられる。

41は四弁花菱文と斜格子文を交互に配置する。瓦当部の成形は半折り曲げ技法である。瓦当裏面

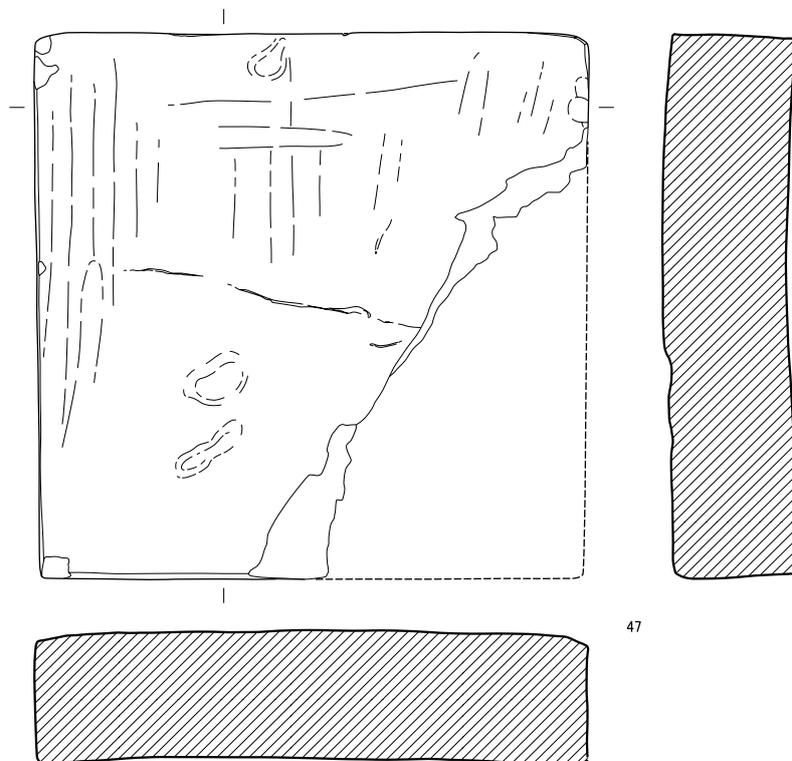
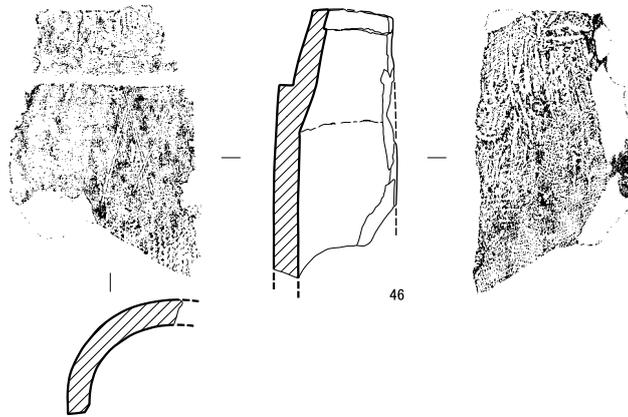
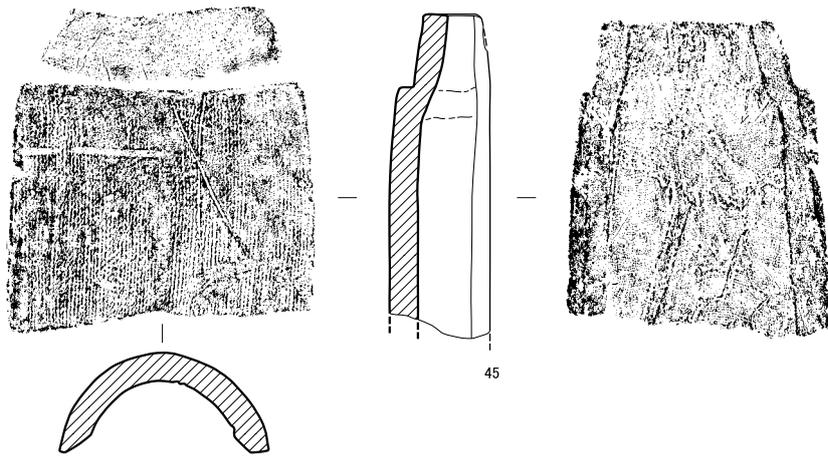


図21 丸瓦・塼拓影及び実測図（1：4）

に指頭圧痕が明瞭に残る。

42は斜格子文の中に菱形を配置する。外区に小さな珠文が付く。平瓦凹部は布目圧痕、顎部裏面には粘土の皺が認められる。平安宮出土の木村-323と同文、古-554と同範である。

43・44は剣頭文である。43は瓦当上面を横ケズリ、平瓦凹部に布目圧痕、瓦当裏面は横ナデ、平瓦凸部に縄目圧痕が残る。44は平瓦凹部に布目圧痕、平瓦凸部を縦ケズリ調整している。瓦当部の成形はともに折り曲げ技法である。

33は長岡京期、34～39は平安時代中期、40～44は平安時代後期である。33・34・38～40・42は近世の土取穴、35は平安時代中期の整地層、36は溝45の石抜取穴、37は土坑30、41・43・44は平安時代後期の整地層から出土した。

**丸瓦 (45・46)** 45は凸面を縄タタキののち部分的に縦方向のヘラケズリを施す。凹部は布目圧痕が残り、糸でかがった痕跡が認められる。側面は縦ケズリで丁寧に調整し、玉縁を横ナデする。凸部玉縁近くに、「×」のヘラ記号を付ける。

46は凸面を縄タタキののち玉縁に近い部分全体に丁寧に横方向のナデを施し、ヘラで斜格子状の記号を描く。玉縁も丁寧に横ナデを施す。凹部は布目圧痕が残る。

45が柱穴42、46は近世の土取穴から出土した。

**磚 (47)** 47は正方形の磚である。型成形である。裏面及び側面はナデ調整、表面はユビまたは工具によるナデ調整で、縦・横方向に行う。部分的に窪みが残る。裏面は中心に向かってわずかに窪む。溝12の側石として転用されていた。平安時代前期とみられる。

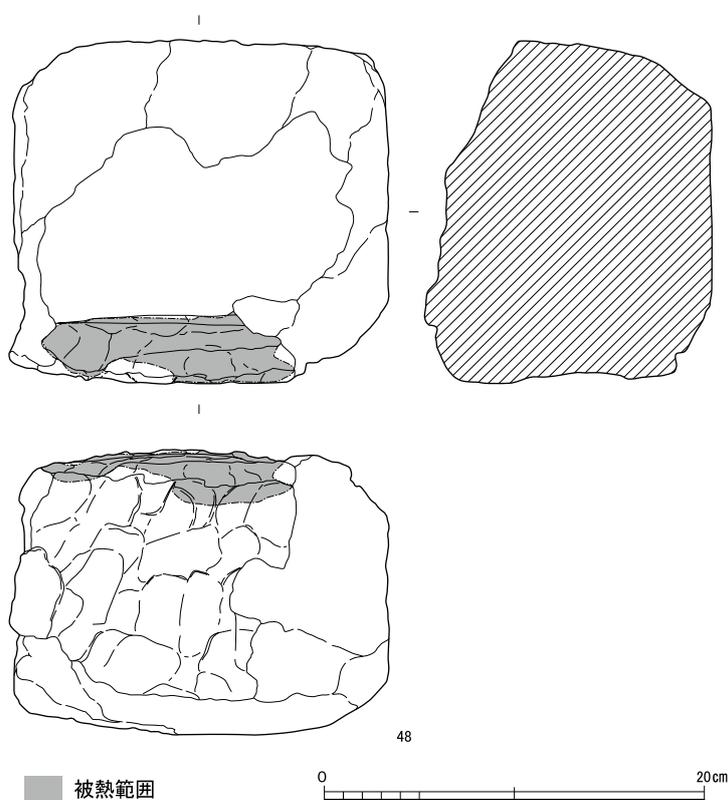


図22 石製品実測図 (1 : 4)

(4) 石製品 (図22、図版7、付表3)

48～50は加工痕のある凝灰岩で、すべて二上山産である。

48は上面・側面に工具による加工痕が明瞭に残る。底面は平坦な面となっている。上面に高さ5～6mmの立ち上がりが残り、また、火災で被熱して赤褐色に変色した部分がある。

49は上面と側面は丁寧に加工され、平滑に均されている。底面は加工されているが、凹凸が多く面はない。3つの側面が欠損しているため形状は不明である。

50は側面は丁寧に加工され、平滑に均されている。上面及び下面にも加工痕と面を確認できる。3つの側面が欠損しているため形状は不明である。

いずれも平安時代前期の建物基壇で使用されていた石材とみられる。48は建物1柱穴35抜取穴、49・50は近世土取穴から出土した。

(5) 金属製品 (図23、図版7、付表3)

51・52は銭貨である。51は「祥符通寶」である。北宋の祥符元年(1008)初鑄。52は「正隆元寶」である。金の正隆三年(1158)初鑄。51は平安時代後期整地層、52は中世以降の遺物包含層から出土した。

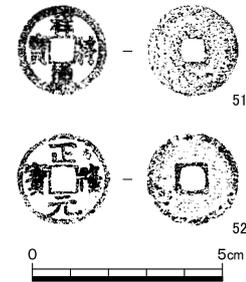


図23 銭貨拓影(1:2)

註

- 1) 上村憲章・小森俊寛「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新

- 2) 『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年。  
以下、文中では「木村-掲載番号」と記す。
- 3) 『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年。  
以下、文中では「古-掲載番号」と記す。
- 4) 『長岡京古瓦聚成 向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集』向日市教育委員会 1987年。
- 5) 「平安宮左馬寮-朝堂院跡・平安京右京一・二条二~四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年。図20-30。
- 6) 植山 茂「平安時代中期の官瓦窯について」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999年。
- 7) 吉崎 伸「小野瓦窯跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年。  
以下、文中では「小野-掲載番号」と記す。
- 8) 『平安宮典薬寮・御井跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-2 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年。図14-17。

## 5. ま と め

今回の調査地は、平安宮内裏に営まれた登華殿・弘徽殿の推定地にあたる。調査ではこれらに該当すると考えられる建物の柱穴や石組溝、基壇状盛土や整地層などを検出することができた。これまでの内裏の調査でも石組溝、基壇状盛土、整地層などが検出されていたものの、柱穴が並ぶ明確な建物の検出例は今回が初めてである。

今回の調査で得られた成果の分析とともに今後の検討課題について述べる。

### (1) 検出遺構の変遷 (図24)

今回の調査では、4面の遺構面で5時期の遺構の変遷が明らかとなった。

以下では検出した遺構を時期ごとに述べる。第4面の平安時代前期の遺構は1期、第3面の平安時代中期の遺構は2期とし、遺構の状況に基づき第3-2面は2-a期、第3-1面は2-b期とした、また、第2面の平安時代後期の遺構は3期、第1面の鎌倉時代の遺構は4期として述べる。

**1期(平安時代前期)** 建物1、土坑25・26、柱穴44がある。いずれも基盤層上面で検出した。建物1は身舎3間以上で、南に庇または縁が付くと考えられる掘立柱建物である。内裏造営時に建てられたとみられる。建物1の柱穴には柱抜取痕があり、建て替えが行われたことがわかる。

**2-a期(平安時代中期)** 溝45、土坑18・24・30・39・40・43、柱穴42、石21・22、瓦溜27がある。溝45は石組溝で、建物の周囲の雨落溝と推定できる。溝45の東側に雨落溝を備えた建物が造られ、周辺が整備された状況がわかる。

この建物は平安時代中期に焼失する。天徳四年の内裏火災が該当し、炭や焼土粒を多く含む土坑18・土坑24・瓦溜27はその処理遺構と考えられる。調査区南半部で確認した中期整地層2は火災後の整地層と考えられる。その上面には石21・石22が設置された。また、多数の土器が出土した土坑30は火災後の建物再建に伴う地鎮遺構の可能性がある。

**2-b期(平安時代中期)** 溝17・38、土坑41がある。中期整地層1による嵩上げが行われ、2-a期の石21・石22は埋没する。溝17・溝38は石組溝で、建物周囲の雨落溝と推定でき、溝38の東側と溝17の北側に建物を想定できる。土坑41は中期整地層1上面で検出した遺構であるが、性格は不明である。

**3期(平安時代後期)** 溝12、基壇状盛土20がある。溝12は石組溝で、建物の周囲の雨落溝と推定でき、東側に建物を想定できる。基壇状盛土20は南北方向に長く、東裾部を石や磚で土留めしていることから、区画施設の塀の基壇と考えられる。

**4期(鎌倉時代)** 鎌倉時代の遺物を含む整地層に伴う建物や付属施設は未検出であり、調査区内では建物配置などは不明である。整地時期は内裏最後の新造が行われた安貞元年(1227)の可能性がある。

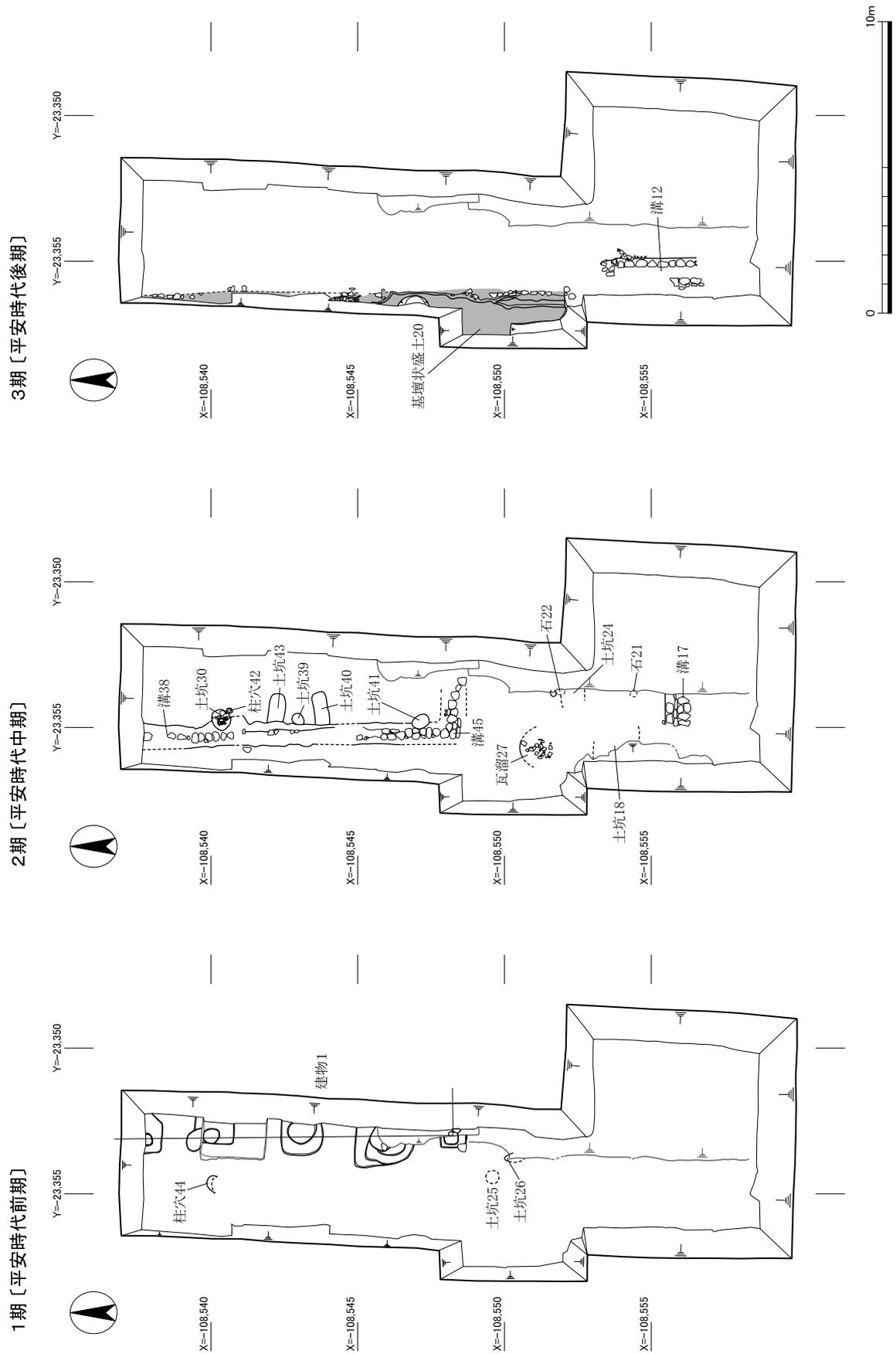


図24 平安時代前期から後期の遺構変遷図 (1 : 200)

## (2) 検出した建物の特定 (図25)

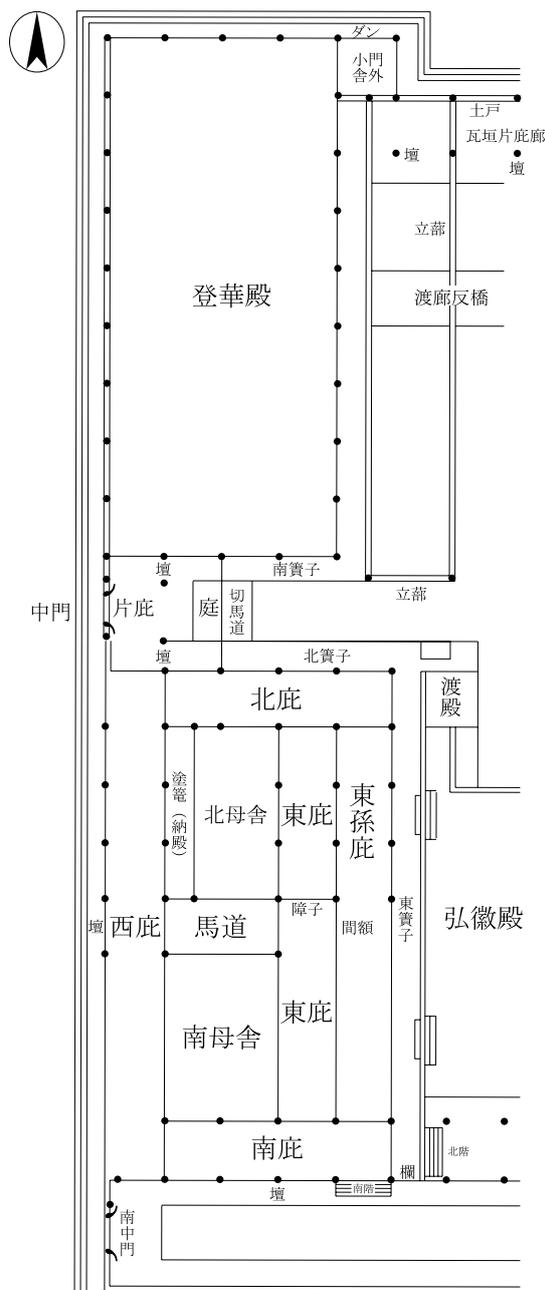
調査地に営まれたと推定される登華殿・弘徽殿は、平安宮内裏北部中央西寄りに位置する状況が『延喜式』所載の「内裏図」に記載されている。登華殿・弘徽殿はともに南北棟で、2棟が南北方向に並び北側が登華殿、南側が弘徽殿となる。今回の調査区北側で検出した建物1と溝38・45の東側に想定できる建物が登華殿、南側で検出した溝17・12に伴うと想定できる建物が弘徽殿に対応すると考えられる。周辺の調査で紹介した図5-14地点で検出した南北溝を登華殿東雨落溝とする推定とも合致する成果である。

## (3) 登華殿の検討 (図26)

建物1は内裏造営時に建てられた掘立柱建物である。長岡宮第二次内裏の調査では、内裏正殿や貞観殿、登華殿、弘徽殿、淑景舎、進物所などに相当する建物及び内郭回廊が確認されている。登華殿に相当する建物としては、梁間4間、桁行9間、柱間3mの掘立柱建物が検出されており、東西端の柱列は確認されていないが、七間四面の南北棟建物が想定されている。また、遷都までの一時期、桓武天皇が居住した長岡京東院の調査では、正殿は掘立・礎石併用建物、脇殿は礎石建物であることが確認されている。<sup>2)</sup>このことから平安京への遷都にあたって、内裏に営まれた建物は掘立柱建物から掘立・礎石併用建物、礎石建物へと

いう変遷があり、平安宮では造営当初から礎石建物が積極的に採用された可能性が指摘されている。<sup>3)</sup>しかし、今回の調査成果では、平安宮内裏造営時には掘立柱建物が建てられたことが判明した。建物1と長岡京第二次内裏の登華殿相当建物は、掘立柱建物としての構造や身舎の柱間が共通することから、建物の移築あるいは構造が受け継がれたとの推測も可能である。

その後、建物1は溝45に伴うと想定される建物に建て替えられる。この建物は、上部を削平されているため礎石や礎石据え付け穴は確認できていないが、礎石建物と推測され、掘立柱建物から礎石建物への転換が行われたことがわかる。調査区北端で検出した溝38は、溝45の直上に位置して



※『大内裏図考証』挿図をトレース

図25 弘徽殿・登華殿建物配置図

おり、溝の部分的な修復やつくり変えの可能性が考えられるが、わずかに遺存するのみであり、詳細は不明である。

溝45は登華殿の西側・南側雨落溝にあたることから、今回の調査で登華殿の南西隅が確定した。また、図5-14地点では東側雨落溝を検出しており、東西の雨落溝間の距離は、肩口内側間で13.3mとなり、建物はこの内に収まることとなる。『大内裏図考証』では内裏の殿舎の復元が行われており、登華殿は七間四面の建物とされている。<sup>4)</sup> 建物を七間四面の礎石建物として復元してみると、梁行方向で身舎2間に東・西庇が取り付け、柱間をすべて建物1と同じく3.0mで復元した場合の東西幅は12mとなり、東西雨落溝の内に収まる。より具体的な構造については軒の出を含めた検討も必要であろうが、図26では仮に建物の東西幅を12mとして復元した。なお、掘立柱建物の建

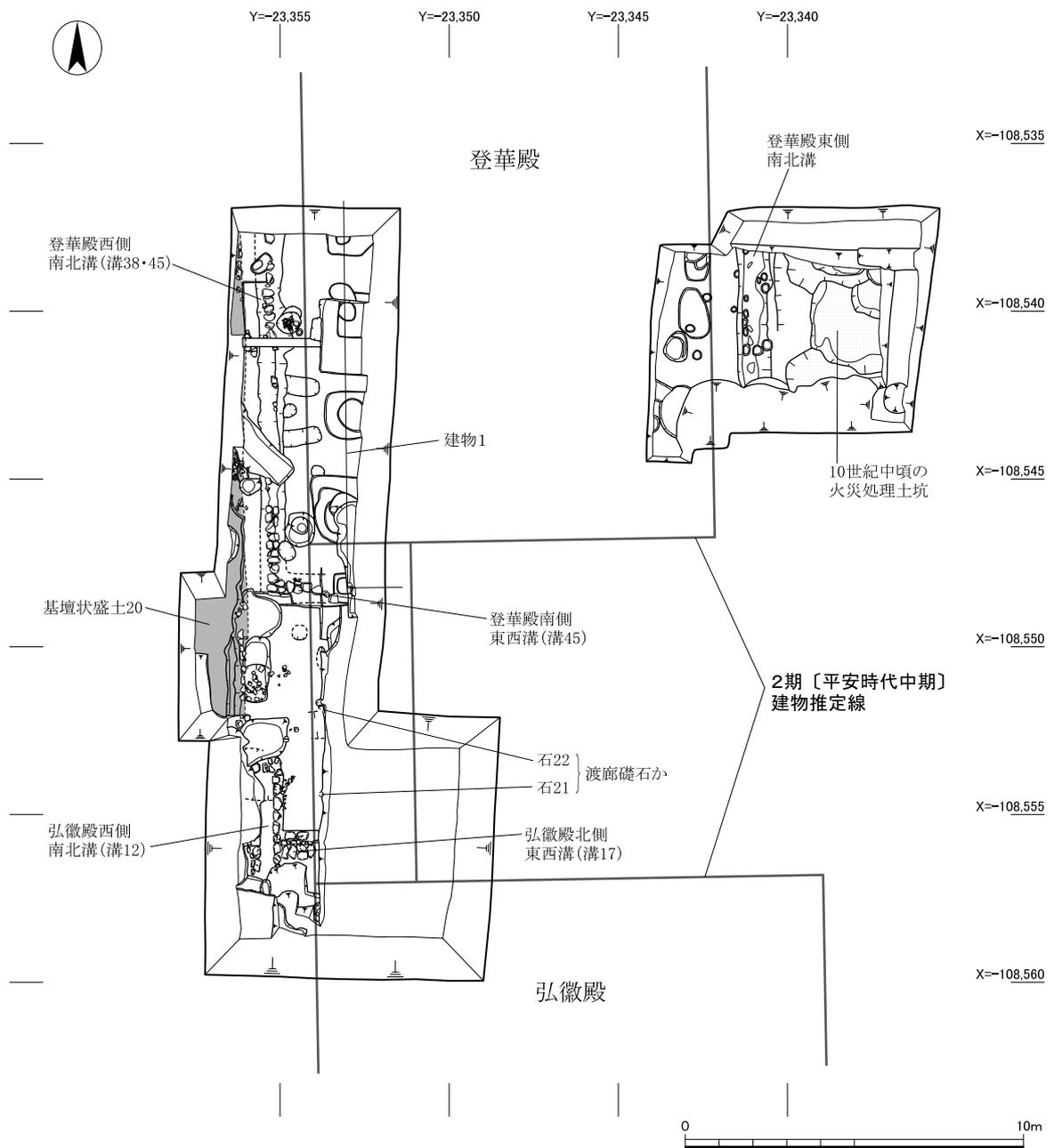


図26 弘徽殿・登華殿想定図 (1:200)

物1は、柱列の位置から東側へ12mの幅で復元すると図5-14地点の雨落溝の位置を越えてしまうことから、七間四面とは異なる構造であったと推定できる。

#### (4) 弘徽殿の検討 (図26)

調査区南半で検出した溝17に伴うと想定される建物は、北側の溝45に伴う建物と同時期に建てられたと推定できる。先行する建物の痕跡は見つかっていない。溝17が北側雨落溝と考えられるが、礎石や礎石据え付け穴が確認できていないため構造の復元は難しい。なお、『大内裏図考証』によれば、登華殿と弘徽殿の間には切馬道(渡廊)が設けられており、石21・石22はこの施設の礎石であった可能性がある。

溝12は、北半で検出した溝38・45の南延長上におおよそ位置し、東側に想定される建物の西側雨落溝と考えられる。ただし、平安時代中期段階には、溝17が建物の北側雨落溝であったと考えた場合、溝12は溝17よりも北側へ延長していることから、平安時代後期段階には建物が北側へ移動していることとなる。この段階では登華殿と弘徽殿を繋いだ渡廊の礎石の可能性のある石21・石22も埋没しており、建物配置に変化があったと推測される。

#### (5) 基壇状盛土20の検討

基壇状盛土20は溝12と同じ平安時代後期の遺構である。上述したように、この時期の建物の構造や配置の詳細は明らかとなっていないが、基壇状盛土20は建物の西側を限る塀などの区画施設の塀の基壇である可能性がある。近似する遺構の一つとして白河南殿の基壇S B 1・2をあげることができる<sup>5)</sup>。基壇裾端に縁石として河原石を2列並べて外装としたもので、基壇には小礫を叩き込み亀腹状に造成する。下層を部分的に掘り込んで基壇を造成し、外装を敷設する点が基壇状盛土20に類似する。今後、同様の遺構が確認された場合、再度検討を加えたい。

#### 註

- 1) 松崎俊郎・中塚 良「長岡宮跡第232・235次(7AN9T・9V地区)～第二次内裏内郭北西部、内郭北西部、内郭北面築地回廊、内裏下層遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第28集』財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1990年。
- 2) 『長岡京左京東院跡の調査研究 正殿地区 古代學研究所研究報告 第7輯』財団法人古代學協會 2002年。なお、登華殿や弘徽殿に相当する建物は検出されていない。
- 3) 網 伸也「平安京の構造」『古代の都3 恒久の都平安京』吉川弘文館 2010年。
- 4) 裏松光世『大内裏図考証』1797年(今泉定介編『故実叢書 大内裏図考証』吉川弘文館 1906年)。
- 5) 堀内明博「白川南殿C調査区」『六勝寺跡発掘調査概要 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年。

付表1 土器類観察表

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	調整、その他
1	土師器	高杯脚部	近世土取穴	—	(8.5)	—	7.5YR6/4にぶい橙色	精良	内面:ナデ、外面:工具によるナデ
2	土師器	製塩土器	柱穴34掘形	—	(6.4)	—	7.5YR5/4にぶい褐色	粗	内面:指頭圧痕、外面:未調整・粘土紐痕
3	土師器	杯	溝45	—	(2.4)	—	5YR8/4淡橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁端部内面に半円形文様
4	黒色土器	風字硯	溝45	縦 (5.9)	横 (4.4)	高 (2.4)	N2/0黒色	精良	内外面:ミガキ、脚部:貼り付け・円形透かし・面取り
5	土師器	椀	土坑30	(13.6)	(2.0)	—	7.5YR6/4にぶい橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
6	土師器	皿	土坑30	13.6	1.9	—	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
7	土師器	杯	土坑30	(13.8)	(1.9)	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
8	土師器	杯	土坑30	(15.7)	(2.4)	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
9	土師器	杯	土坑30	(19.8)	(3.7)	—	5YR6/6褐色、10YR4/3にぶい黄褐色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
10	土師器	蓋	土坑30	(18.8)	(1.8)	—	2.5Y6/8褐色	精良	内面:ハケ、外面:ケズリ・ナデ・ミガキ
11	土師器	高台付杯	土坑30	—	(2.3)	(11.0)	10YR8/4浅黄色	精良	内面:ヨコナデ、外面:ケズリ・ナデ、ヘラ切り・貼り付け高台
12	土師器	甕	土坑30	19.0	(7.7)	—	7.5YR7/6褐色	精良	内面:ハケ・ヨコナデ、外面:ヨコナデ・タタキ
13	黒色土器	杯	土坑30	16.4	(4.6)	—	内面~口縁部外面:N2/0黒色、外面:7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内面:ナデ・ミガキ・暗文、外面:オサエ・ナデ
14	須恵器	杯B	土坑30	19.2	6.6	11.9	N6/0灰色	良	内外面:回転ナデ、底面:ヘラ切り・回転ナデ
15	緑釉陶器	椀	土坑30	—	(2.3)	—	10YR7/2にぶい黄橙色、釉:淡黄緑色	精良	内外面:ナデ、外面下部:回転ケズリ
16	土師器	椀か杯	土坑41	—	(1.9)	—	10YR7/2にぶい黄橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
17	土師器	椀か杯	土坑41	—	(2.6)	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
18	土師器	皿	土坑41	—	(1.9)	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
19	土師器	杯	土坑41	—	(2.3)	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
20	土師器	杯	土坑39	11.0	2.3	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
21	土師器	皿	土坑39	(12.1)	(1.6)	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
22	土師器	皿	土坑39	(12.8)	(1.7)	—	10YR6/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
23	土師器	皿	土坑39	(13.0)	(1.6)	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
24	土師器	皿	土坑18	(11.2)	(1.1)	—	5YR6/6褐色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
25	土師器	皿	溝12	—	(2.7)	—	7.5YR6/4にぶい橙色	精良	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ

※ ( )は残存数値

付表2 瓦類観察表

No.	種類	文様	遺構名	縦 (cm)	横 (cm)	長さ (cm)	色調	胎土	調整、その他
26	軒丸瓦	蓮華文	近世土取穴	(10.6)	(7.7)	(5.1)	7.5YR7/4にぶい 橙色	精良	凸面:縦ケズリ、瓦当側面:横ケズリ、 瓦当裏面:布目圧痕
27	軒丸瓦	蓮華文	近世土取穴	(10.8)	(14.7)	(5.3)	N5/0灰色	精良	瓦当側面:横ケズリ、 瓦当裏面:横ナデ・縦ナデ・オサエ
28	軒丸瓦	蓮華文	近世土取穴	(9.6)	12.5	(9.2)	N3/0暗灰色	良	凸面・瓦当裏面:縦ナデ、凹面:布目圧痕、 側面:横ケズリ
29	軒丸瓦	蓮華文	近世土取穴	(7.2)	(6.4)	(3.7)	N4/0灰色	良	凸面:縦ナデ、瓦当裏面:ナデ
30	軒丸瓦	蓮華文	平安時代後期 整地層	(5.8)	(7.2)	(3.0)	2.5Y8/2灰白色	良	瓦当側面:横ナデ、瓦当裏面:ナデ
31	軒丸瓦	蓮華文	近世土取穴	(5.5)	(6.0)	(4.3)	N4/0灰色	良	瓦当側面・裏面:ナデ
32	軒丸瓦	三巴文 (右巻き)	平安時代後期 整地層	11.7	(12.1)	(5.1)	N4/0灰色	良	凸面:縦ケズリ、凹面:縦ナデ、瓦当側面:ナデ、 瓦当裏面:ケズリ・オサエ
33	軒平瓦	均整唐草文	近世土取穴	6.6	(13.0)	(10.3)	2.5Y7/2灰白色	良	凸面:縄目タタキ・縦ケズリ、 凹面:布目圧痕・横ケズリ、顎部下部:横ケズリ
34	軒平瓦	均整唐草文	近世土取穴	(7.2)	(6.5)	(9.5)	10YR8/4浅黄橙色 ~2.5Y7/2灰白色	良	磨滅のため不明
35	軒平瓦	唐草文	平安時代中期 整地層	6.5	(6.4)	(8.4)	2.5Y6/1黄灰色	やや粗	凸面・側面:縦ケズリ、凹面:布目圧痕、 顎部下部:ケズリ
36	軒平瓦	均整唐草文	溝45 石抜取穴	7.0	(18.1)	(14.2)	N3/0暗灰色	良	凸面・側面:縦ケズリ・横ナデ、凹面:布目圧痕、 顎部下部:横ケズリ、顎部裏面:縦ケズリのち横ナデ
37	軒平瓦	唐草文	土坑30	(6.1)	(7.3)	(5.3)	N4/0灰色	良	顎部下部・瓦当裏面:横ケズリ
38	軒平瓦	唐草文	近世土取穴	5.0	(7.5)	(4.9)	2.5Y6/1黄灰色	やや粗	凸面:縦ナデ、凹面:布目圧痕、 顎部下部・瓦当裏面:横ナデ、側面:縦ケズリ
39	軒平瓦	唐草文	近世土取穴	(4.9)	(7.6)	(5.3)	10YR6/3にぶい 黄橙色	やや粗	凸面:縦ナデ、凹面:布目圧痕、 顎部下部・瓦当裏面:横ケズリ
40	軒平瓦	唐草文	近世土取穴	(5.0)	(8.0)	(13.4)	5Y6/1灰色	やや粗	凸面:縦ケズリ、凹面:布目圧痕のち縦ケズリ・ 横ケズリ、顎部下部:横ケズリ、二次的に被熱
41	軒平瓦	四弁花菱・ 斜格子文	平安時代後期 整地層	(3.6)	(8.7)	(4.4)	N5/0灰色	良	凸面:縦ナデ、顎部下部:横ケズリ、 瓦当裏面:オサエ
42	軒平瓦	斜格子文	近世土取穴	4.6	(11.6)	(4.5)	N4/0灰色	良	凹面:布目圧痕、顎部下部:横ケズリ、 瓦当裏面:横ケズリ・横ナデ
43	軒平瓦	剣頭文	平安時代後期 整地層	3.6	(7.0)	(6.2)	N5/0灰色	良	凸面:縄目タタキ、凹面:布目圧痕・ナデ・横ケズリ、 顎部下部・瓦当裏面:横ナデ
44	軒平瓦	剣頭文	平安時代後期 整地層	3.5	(6.5)	(2.3)	N3/0暗灰色~ 2.5Y8/3浅黄色	良	凸面:縦ケズリ、凹面:布目圧痕、 顎部下部:横ケズリ、瓦当裏面:横ナデ
45	丸瓦	—	柱穴42	5.3	11.0	(17.2)	10YR7/4にぶい 黄橙色	良	凸面:縄目タタキ・縦ナデ・ヘラ記号、 凹面:布目圧痕、側面:縦ケズリ、玉縁:横ナデ
46	丸瓦	—	近世土取穴	—	(6.1)	(14.3)	2.5Y8/1灰白色	良	凸面:縄目タタキ・横ナデ・ヘラ記号、 凹面:布目圧痕、側面:縦ケズリ
47	埴	—	溝12	29.0	29.3	厚 7.3	5Y5/1灰色	やや粗	表面:ユビまたは工具によるナデ、側面・裏面:ナデ、 型枠成形、所々に粘土塊単位残る

※ ( )は残存数値

付表3 石製品・金属製品観察表

No.	種類	遺構名	材質	寸法(cm)	重さ(g)	備考
48	基壇石材	柱穴35抜取穴	凝灰岩	縦18.2、横(20.0)、厚(15.1)	4380	2面に加工痕、その他2面に面あり、上面に立ち上がり、 被熱による変色あり、径0.5~2mmの礫含、白色
49	基壇石材	近世土取穴	凝灰岩	縦(26.0)、横(30.5)、厚(14.4)	7560	上面・側面に丁寧な加工痕、径1mm以下の礫少量含、 白色
50	基壇石材	近世土取穴	凝灰岩	縦(39.4)、横(29.9)、厚16.2	10980	上面・下面に加工痕・面、径2~20mmの礫多量含、 30~40mmの礫極少量含、白色
51	銭貨	平安時代後期 整地層	銅銭	直径2.5、厚0.1	3.157	「祥符通寶」
52	銭貨	中世以降包含層	銅銭	直径2.5、厚0.1	2.705	「正隆元寶」

※ ( )は残存数値

# 圖 版





1 調査区南半部 第1面全景（北から）



2 調査区北半部 第1面全景（北から）



1 調査区南半部 第2・3面全景（北から）



2 調査区北半部 第2面全景（北から）



1 調査区北半部 第2～4面全景（北から）



2 調査区南半部 平安時代整地層断面（南東から）



1 溝12・溝17 (北から)



2 基壇状盛土20 (南東から)



3 溝38 (南から)



1 溝45南半（北西から）



2 溝45の底石（北から）



3 溝45の縁石・底石（東から）



4 土坑30遺物出土状況（北東から）



1 建物1 (北西から)



2 建物1 柱穴33検出状況 (南東から)



3 建物1 柱穴34断面 (南西から)



4 建物1 柱穴34根固め石検出状況 (西から)





軒丸瓦・軒平瓦

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅうだいらあと・じゅらくだいらあと							
書名	平安宮内裏跡・聚楽第跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-6							
編著者名	近藤奈央							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年12月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうあと 平安宮跡 じゅらくだいらあと 聚楽第跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 でみずどおりつちやまち 出神通土屋町 ひがしいるひがししんめいちょう 東入東神明町  290番地の1・2	26100	2  234	35度 01分 17秒	135度 44分 39秒	2015年6月 29日～2015 年8月17日	145㎡	グループ ホーム 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮跡  聚楽第跡	都城跡  平城跡	古墳時代  奈良時代  平安時代前期 ～中期  平安時代後期  鎌倉時代  中世・近世 以降	   掘立柱建物、整地 層、溝、柱穴、土 坑、瓦溜め  整地層、溝、基壇 状盛土  整地層	土師器  製塩土器、瓦  土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、白色土器、瓦、 石製品  土師器、瓦、銭貨  土師器  土師器、須恵器、焼締 陶器、施釉陶器、染付 磁器、金属製品、瓦		平安宮創建期の建 物跡、平安時代中 期以降の雨落溝な どを検出した。 平安宮内裏の弘徽 殿・登華殿に関係 する遺構と推定さ れる。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-6

## 平安宮内裏跡・聚楽第跡

発行日 2015年12月18日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961